

る俳道に重きを置いての道心の修練であつた。否芭蕉に於ては俳道の修行即俳道の修行であつたのである。その爲には「羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なんこれ天の命なり」(奥の細道)と覺悟して捨身の旅を續けたのであつた。かくて神社佛閣に詣でば「また上もなき峰の松風、身に沁むばかり深き心を興し」(甲子吟行)名山大川を訪うて大自然の懷に抱かれつゝ、天地の靈光に浴し、四時の移り變りに伴ひて新陳代謝する山紫水明の風光を讚美し、旁々名所舊跡に尋ね入りて、歴史の醜穢せる郷土愛の詩情に耽り、又天子の御陵に賴き、義人節婦の遺蹟を弔ひて懐古の涙を墮し、風雅の道者に逢ひ隠逸の騷士を晉づれて、長途の旅情を慰めてゐる。

芭蕉の行脚の副産物ともいふべきは、旅中到的所に俳諧の種をこぼしたことである。旅の途すがらその地方々々の俳人を訪づれもし、訪はれもして、親しく俳談を交へ、俳諧の一卷二巻を残して、地方俳人に懇ろなる指導を傳へ、地方俳壇に大いなる刺戟を與へた。その事がおのづから蕉風俳諧の宣傳、芭蕉の勢力扶植といふ結果を生んだ。蕉門の俳士三千などいふことは、この行脚中に歸仰したものが多かつたのである。芭蕉の行脚は自己完成の爲の俳道修練であつたのだがその爲に俳道の宣揚、俳人の養成といふ結果を齎らしたのであつた。

野ざらし紀行

この紀行は芭蕉の紀行の最初のもので、貞享元年芭蕉四十一歳の秋八月より、翌二年夏四月に至る約九ヶ月程の旅行記である。この紀行は「芭蕉翁道の記」「甲子吟行」「野ざらし紀行」「草枕」など呼ばれてゐる。

一、芭蕉翁道の記 元禄十一年十一月刊行の風國編の泊船集にかく題して載せてゐる。この紀行が板行されたのは

これが最初である。道の記といふは芭蕉の命名した紀行文の名ではなく、唯旅行記といふほどの意味で、編者風國の附けたものである。

二、甲子吟行 この紀行は芭蕉の眞蹟に素堂自筆の跋の附いたものか門人會良の手から木曾の養川某に傳へられ、寄山といふ人が之を模寫して同門の波靜に與へ、安永九年に星運堂から發刊された。それが甲子吟行である。芭蕉が江戸を發足したのが、貞享元年でその干支が甲子に當つてゐるから名づけたもので、この題號も芭蕉の命名でなく、波靜等の附けたものであらう。芭蕉の眞蹟本は繪巻物で、淡彩の畫が挿まれてゐたのだが、寄山は畫の模寫に堪へず畫の所は城とか森とか、塔とか、小家とか記してゐる。蝶夢の芭蕉翁文集、湖中等の一葉集、黙池の袖珍鈔及び四部録等は甲子吟行と稱してゐる。甲子吟行が普通の稱呼となつてゐる。

三、野晒紀行 野晒紀行畫卷は芭蕉の門人中川濁子が畫を加へ、素堂の跋と芭蕉の奥書のあるもので、本文の筆者は芭蕉でなく、素堂との説もあるが、確實ではない。原畫卷は東京の大橋家に珍藏されてゐる。芭蕉自筆の奥書は、此一巻は必紀行の式にもあらず、たゞ山橋野店の風景一念一動をしるすのみ。爰に中川氏濁子丹青をして、其形容を補しむ他見可恥ものなり。

た び ぬ し て 我 句 を し れ や 秋 の 風

といふのである。明和五年に月下の跋を附して文臺屋から板行された「野ざらし紀行」一冊は誤脱の甚だしいものである。この野晒紀行といふ題號も芭蕉の命名ではなく、この紀行の首途に

野 ざ ら し を 心 に 風 の し む 身 哉 芭 蕉

といふ句のあるに因みての名稱であらう。紀行中にも、

野ざらし紀行

武蔵野を出る時野ざらしを心におもひて旅立ければ

死にもせぬ旅寝の果よ秋の暮芭蕉

とありて、山野に骸を晒す覚悟にての旅なれば、野ざらし紀行といふは最もふさはしき題號と思はれる。野ざらし紀行といふ名は許六の歴代滑稽傳に「草枕共野ざらしの紀行共いふ」とあるのが初見である。關東の蓬萊島にも野ざらし紀行として載せてある。

四、草枕 前に擧げた歴代滑稽傳に許六は「草枕共野ざらしの紀行共いふ」といつてゐるほか、許六は風俗文選の旅の賦にも「其風雅にたより俗談をあつめ、狂賦五段となす。あなかしこ奥の細道、草枕の類にはあらず」と云つてゐるこの草枕も野ざらし紀行を指してゐるらしい。芭蕉庵春秋の著者葛飾素蓮は「草枕は紀行の本名なれば、愚は野晒以下の表題は取らず」と云つてゐるが、草枕をこの紀行の本名といふことも信ぜられない。私は野ざらし紀行といふ名が良いと考へてゐる。

なほこの紀行の註釋書は、

野ざらし紀行翠嵐抄	石河 積翠
泊船集解説	馬場 錦江
泊船集注解	輕 花 坊
芭蕉紀行全集	三村 鴻 堂
芭蕉紀行全集	樋 口 功
芭蕉文集の詳解と鑑賞	岩 田 九 郎

等の中に野ざらし紀行の註釋がある。

この紀行文は今日容易に見得られるものであるから、全文を掲げる必要はない。唯旅行の道順を概説すればよからう。芭蕉は淺草に住んでゐた門人千里を伴ひて、深川芭蕉庵を出た。紀行の發端に、

千里に旅立て路糧をつゝまず、三更月下無何に入ると云けむむかしの人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月江上の破屋をいづる程風の聲そゞろ寒げなり。

野ざらしを心に風のしむ身哉

芭蕉は捨身の行に出たのである。骸を山野に晒すことを期してゐる野ざらしの一句にその眞剣味が溢れてゐる。

かくて箱根の關を越え、富士川のほとりにて三つばかりなる捨子の哀れげに泣くを見て「小萩のものと秋の風こよひやちるらん、あすやしほれん」と袂より喰物なけて、

猿を聞く人捨子に秋の風いかに

と同情はしたが、さて今の芭蕉にはこの捨子を救ふ力がない。同行の千里には多少の餘力があつたであらうと推測されるが、旅の空とて致し方が無かつた。或はこの捨子は親たちのよくない心から旅人に同情を乞ふ一つの手段として當時は珍しからぬ策略であつたかも知れない。芭蕉はそれを看破したのかも知れない。その時代には捨子といふものは稀では無かつたらうと思はれる。惻隱の情はあるとしても一々それに同情はしきれなかつたかも知れぬ。芭蕉は行脚に出るとすぐ難關にぶつかつた。

さればにや芭蕉は「いかにぞや、汝ちゝに悪まれたる歎母にうとまれたるか。ちゝは汝を悪むにあらじ、母は汝をうとむにあらじ。唯これ天にして、汝が性のつたなきをなけ」と云つてゐる。「唯これ天にして、汝が性のつたなき

をなけ」とはいかにも冷酷だといつてよく批難される。芭蕉も捨身の旅である。天命を知れば、どうにもしやうがない。路傍に捨てられてゐる捨子は、往還の多くの人の眼にさらされてゐる。芭蕉よりも有力な旅人に同情の手を延ばしてもらふより致し方が無かつたのであろう。

大井川を越えて、馬上に鞭をたれて杜牧が早行の詩を偲び、伊勢に着きて風瀑が宿を訪ひ、伊勢神宮に参拜して西行谷を過ぎ、九月の初故郷上野に歸つた。約九年ぶりの歸郷である。兩親既に歿してゐる。母はこの前年に永眠したので感慨無量であつた。

それより芭蕉は同行千里の郷里なる大和の竹の内に行脚して数日足を止め、その附近なる當麻寺に詣で、

僧 朝 顔 幾 死 か へ る 法 の 松

と吟じ、芭蕉は獨り吉野の奥に分け入り、西行の草の庵の跡を尋ね、

露 と く く こ ゝ ろ み に 浮 世 す ゝ が は や

と詠じ、後醍醐帝の御陵を拜し、

御 廟 年 經 て 忍 は 何 を し の ぶ 草

それより山城を経て近江路に入り美濃に至る。不破の關址を訪ひ、大垣にては木因の家をあるじとし、

死 に も せ ぬ 旅 寝 の 果 よ 秋 の 暮

と感懐を洩らし、桑名本當寺より尾張の熱田に詣でて「社頭大いに破れ築地はたふれて草村にかくる。かしこに繩をはりて小社の跡をしるし、爰に石をすゑて其神と名のる」とて荒廢の様を歎き、名古屋に入る道の程、

草 枕 犬 も 時 雨 る ポ か よ る の こ 五

と風吟し、

年 暮 れ ぬ 笠 きて 草 鞋 は き な が ら

といひ、郷里の山家に年を越えて貞享二年の春を迎へ、奈良に出て二月堂水取の修法に籠り、更に京に上りて三井秋風が鳴瀨山莊を訪ひ、伏見西岸寺に任口上人に逢ひ、大津に越え、湖水の眺望に吟魂を惱まし、更に轉じて近江に入り水口にて二十年を経て故人土芳に逢ひ、

命 一 つ の 中 に 生 た る 櫻 哉

途すがら伊豆の蛭が小島の僧に連れ立ち、鎌倉圓覺寺の大願和尚の遷化を聞きつゝ名古屋の杜園に、

白 け し に 羽 も ぐ 蝶 の 形 見 哉

と申おくり、熱田の桐葉がもとより東に下らんとて、甲斐の山中に立より、四月の末江戸の芭蕉庵に入りて、

夏 衣 い ま だ 風 を と り つ く さ ず

この句を結びとして、野さらしの旅は終つた。

3 野さらし紀行の文は「奥の細道」の如く洗練されてゐない。

廿日餘の月かすかに見えて山の根際いとくらきに、馬上に鞭をたれて數里いまだ雞鳴ならず、杜牧が早行の殘夢小夜の中山に至りて忽驚。

の如きはやゝ生硬の感さへある。この旅中の俳句にもなほ談林の生硬が残つてゐる如く、文章にもさうした氣分が残つてゐる。だかこの紀行文が處女作であつた芭蕉としては熱情をこめて力一杯に書いた爲に、すこし固くなつたのでは無からうか。

貞享時代の芭蕉
素堂の筆になる跋文は大いに参考となる。芭蕉が江戸に歸つて、この紀行の草稿を示したのに就いての感想である。

野ざらし紀行の俳句

「野ざらし紀行」に於て發表された芭蕉の俳句は、總數四十五である。現代の俳人は唯一日の吟行に於てさへ、二十句も三十句も發表することがある。半歳以上の旅中吟として、芭蕉の四十五句は甚だ少ないと謂へる。芭蕉と雖もこの旅行に於て得たる俳句は、これだけでは無かつたらう。或は幾百の中から精選した四十五句であつたらう。「笈の小文」の旅でも「奥の細道」の旅でも、紀行中に發表された芭蕉の句は多くはない。多數の句を惜氣なく捨てた芭蕉の藝術的良心は、偉大と言ふべきだ。

又おもふに、芭蕉は元來寡作であつたのだらう。その寡い句を推敲し洗練して、自信を得るまで止まなかつたのである。芭蕉ほど句を推敲した人は少ない。一度發表した句をも、日を経て更に推敲し更に洗練して改作した事實は、芭蕉の作に句形の異同の多いことに依つても認められる。假令今日から觀て佳作とは言へない句でも、芭蕉としては相當の自信を持つてゐたのであらう。去來が「師（芭蕉）の句をうかどふに、嚴なるものあり、やさしきものあり、狂賢なるものあり、深遠なるものあり、平易なるものあり、健かなるものあり、あはれなるものあり、ふつゝかなる物有り、潤はしき物あり、なほ千姿萬體有りといへども、さび、しをりあらざる句はなし。」と極言する所以である。古池の句以後の芭蕉の句には句々芭蕉の生命が宿つてゐると言へよう。

兎に角長い旅行の句として、四十五句は寡いのであるがしかし、その四十五句の中には、芭蕉の代表的佳作として觀るべきものが少なくないのである。その點から言へば、野ざらし紀行の芭蕉の收穫は、實に大なるものがあつたのである。芭蕉の俳句はこの旅によつて、たしかにその眞面目を發露したのであつた。多年沈潜されてゐた芭蕉の蘊蓄が、一時に華を發いたといふ觀がある。芭蕉俳句の後期は實にこの野ざらし紀行の句から始まるのである。その四十五句の中、先づ擧ぐべきは次の七句である。

○ 野ざらしを心に風のしむ身かな
道の邊の木権は馬に喰はれけり
秋風や藪も晶も不破の關
年暮れぬ笠きて草鞋はきながら
春なれや名もなき山の薄霞
水とりや氷の僧の杵の音
山路來て何やらゆかしすみれ草

これ等の七句は、大體に於て、同じ傾向のものと言へるその表現の形式が貞徳、談林の舊風を脱して、いさゝかも其の臭氣なく、全く芭蕉獨創のもので、蕉風の醇厚たるものである。又句形が十七音の本格的形式を保ち、字餘りなどの變體的な佞屈なところがなく、又語々緊密妥當に連続して、毫も晦澁なところもなく、特別に解説を要する言葉もなく、まことに平易明快である。尙其の内容的には何れも芭蕉が旅中親しく接觸した事象に感を發しての吟詠で、單なる寫生句でもなく、又想像架空の作でもなく作者の生活より滲み出た生觀句である。芭蕉の佳句の多くがそれで

野ざらし紀行の俳句

ある如く、これ等の句は客観に基礎づけられた主観的表現の句と言ふべきである。この七句を評釋して、芭蕉の句の特色を見よう。なほ野ざらし紀行の句の前には大體文章が附いてゐる。それが紀行文であると同時に、句の前書になつてゐるから、その文章を併せて讀めば、句が一層よく鑑賞される。

野ざらしを心に風のしむ身かな

「野ざらし」は「野晒」で、屍を山野にうち捨てて風雨に曝すこと。「風のしむ身」は秋風の冷々と身に入りこむこと。「身に入む」は秋の季節である。芭蕉は家を捨て身を捨てゝの行脚である。山に臥し野に臥し、草枕の旅をつゞけて、何處で野晒しの軀體とならうとも厭はじと、深く心に期するところがある。その首途の一步を踏み出すと、冷々として秋風が身にしみわたり、一しほ行脚の心を引緊めて呉れるといふのである。芭蕉が貞徳談林の遊樂句、洒落俳句から脱却し自然の懷に抱かれて、俳諧に生きようとする堅い決心が、この一句によく現はれてゐる。素堂の跋に「そも野ざらしの風は出たつあしもとに千里のおもひをいだくや、きく人さへぞそとら寒け也」と云つてゐるのも併せ味ふべきである。

馬上吟

道の邊の木槿は馬に喰はれけり

木槿は落葉小灌木で、莖の高さ一丈ばかり、夏から秋に單瓣又は重瓣の花を開く、淡紫色、淡紅色、白色等種々ある。句に木槿とあるは木槿の花のことである。花のほとりに葉の附いてゐるのである。

句意は説明するまでもなく平明で、芭蕉が馬に乗つたまゝ見てゐると、道べりに咲いてゐた木槿の花を馬が一口に喰つた。それを馬上から眺めた即吟である。何の理窟もなく、何の街氣もない。素堂は「山路來てのすみれ道ばたの

むくげこそ、此の吟行の秀逸なるべけれ」と云つてゐる。許六の「歴代滑稽傳」には「日々向上にすり上げ、終に談林を見破り、はじめて正風林を見届、躬恒、貫之の本情を探て始て、

道野邊の木槿は馬に喰はれたり

と申されたり」と云つてゐる。許六は「喰はれたり」と云つてゐるが「喰はれけり」が宜しい。又「伊達衣」には「馬の喰ひけり」となつてゐるが、それでは單なる寫生句となつて句意が淺く聞える。又「或問珍」「一葉集」等に「道ばたの」となつてゐるが、それでは句品が低くなるであらう。

「芭蕉發句說叢大全」に或説を引いて、芭蕉が佛頂禪師に參禪の頃、禪師は俳諧は綺語怪詞何の益ありやと常に戒められしに、芭蕉の曰く「俳諧はただ今日の事、目前の事にて候」とて木槿の句を即吟されしに、佛頂つら／＼考へて「善哉々々俳諧もかゝる深意あるものにこそ」と殊に感ぜられて、それより後は制し給はず、禪意に叶へるところありと見ゆと云つてゐる。この問答に就いては確かな文獻なく、恐らく事實ではあるまい。禪意に叶ふと云へば、この句のみならず、後期の芭蕉の句は禪意に適うてゐるものが多いであらう。

又同說叢大全にこの句を説いて「句意は、人は居所にこそよるものなれ。世の諺に出る枕は打たるゝといふ事あり人をの／＼身の分さいに分量を守れかしといふ事也」と云つて、この句を教訓的に解してゐる。芭蕉の作意はかゝる教訓的のものでなく、眼前の即景を淡々と叙べたまでであらう。されど之を讀む者教訓的に解して、身を戒むる修養の一助とするは、俳諧の應用で、句の一徳といふべく、これは別問題である。

秋風や藪も島も不破の關

野ざらし紀行の俳句

美濃の國不破の關址での吟である。不破の關は早く壬申の亂に要塞として重要視せられ、元正天皇の養老五年に關の事績日本紀に見え、古へ伊勢の鈴鹿、越前の愛發の關と共に日本三關の一とされたが、早く廢れて平安朝の末には「人住まぬ不破の關屋の板びさし荒れに」はたゞ秋の風」と藤原良經の詠じた如く、關守も居なくなつた。關址は今關原町大字松尾に屬してゐる。今もその址とて一民家の庭に記念碑が建つてゐて、藪も島もある。芭蕉の時代にもその藪や島があつたのである。

芭蕉の句は良經の「荒れに」は後にはたゞ秋の風」の和歌を踏まへて、眼前の光景をそのままに「藪も島も」と詠んだのである。句には不破の關とあれど「藪も島も」と係つてゐるから、おのづから不破の關址と聞えるのである。この句も單なる客觀寫生に終らずして、讀む者に關址の現状を髣髴せしめると共に、良經の和歌を連想せしめ、歴史的感懐を深からしめる。それが芭蕉の句の一特色である。

爰に草鞋をときかして杖を捨て旅寝ながらに年の暮れければ

2年暮れぬ笠きて草鞋はきながら

旅人芭蕉の姿のさながらに浮び出た句である。野ざらしを心に期して、あちこちの旅寝を重ね、日數積りてやうやく年の暮に當りてこの作あり「年暮れぬ」と先づ境遇の實相を叙べ「笠きて草鞋はきながら」と旅人芭蕉の姿を如實に表現してゐる。芭蕉が自然に順應する、大らかな息吹の感ぜられる句である。「笠きて草鞋はきながら」の自己を喜ぶでもなく、悲むでもなく、生死を解脱してあるがまゝに自然に順應した芭蕉の尊とさが偲ばれる。かくて芭蕉は更に旅寝の日數を重ね「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」の終焉に達したのである。我々とても「笠きて草鞋はきながら」の長途の旅をつとけてゐるに變りはない。

3 春なれや名もなき山の薄霞

この句、泊船集、小文庫、宇陀法師などに「朝霞」となつてゐる。芭蕉が改作したものであらう。薄霞よりも朝霞が宜しい。「春は曙」と枕草紙にも云つてゐる。朝霞といへば、「春なれや」の感が強くひびく。「春なれや」のやは感嘆詞で「春であるわい」といふ氣持。「名もなき山」は餘り名の聞えてゐない小さな山。この句は芭蕉が伊賀の郷里で新年を迎へ、まだ春淺き頃奈良の水取を拜みに出た、その途すがらの吟である。上野から奈良へ出る途中の小山に朝霞がたなびいて、一種言ふべからざる優雅の趣が掬される。おゝ春だ、あの霞のかゝつてゐる山の趣はどうだと驚いたのである。自然と一枚になりきつた芭蕉の心が味はへる。「師走囊」に「名も無きと云へる言葉、一句の作意也」とあるが、作意といふはいかゞなれど、名も無き山にも捨てがたき趣のあることに心の動いての句であることは誤りでない。

二月堂に籠りて

水とりや氷の僧の香の音

蝶夢の「芭蕉翁繪詞傳」及び「芭蕉翁發句集」には中七「こもりの僧」となつてゐるが、これ等は芭蕉歿後百年を経ての刊行なれば、芭蕉眞蹟と云はれてゐる甲子吟行の「氷の僧」に従ふべく「小文庫」も「氷の僧」である。

二月堂は奈良若草山の麓、東大寺の境内三月堂の裏の懸崖の上に建つてゐる。天平勝寶四年僧實忠の創始である。毎年二月朔日より十四日まで（今は三月一日より十四日まで）修二會が行はれる。二月堂の階段廊を下つた處に參籠所がある。參籠の僧は夜童子に松明をかつがせて上堂し杵の音高々と内陣に入る。十二日には龍松明とお水取の行法がある。この夜は參詣人が多い。二月堂の下には圓伽井があり、若狭井と呼んでゐる。十二日の眞夜中この井戸から

野ざらし紀行の俳句

香水を汲取り、二月堂の開伽の水とする。その水は遠く若狭の國邊敷川から来るといふ。昔賀忠が修二會行法の初、遠敷明神の開伽の水を奉られたといふ傳説に基いてゐるのである。芭蕉は十二日の夜參籠所、お水取の式を拜んだのであらう。その式は極めて崇嚴なものである。

句意は、お水取が嚴かに行はれる。僧（練行業）たちの氷りつくやうな杵の音が、寒い夜空に響き渡るよと云ふのである。「氷の僧」と云つたのは、寒夜練行に疲れて凍切つてゐる僧である。その崇嚴さが強く現はれてゐる。毎年お水取の頃は不思議に、冴返りて寒いものである。「こもりの僧」では、その感じが弱い。

④ 山路来て何やらゆかしすみれ草

京都から大津へ越える山中にての作である。越人の「鵲尾冠」には「二度草堂をいで尾陽に来るとき箱根にて」と前書あり。其角の新山家、類柑子にも「箱根にて」の吟とあり。されど二度深川の草堂を出でしは笈の小文の旅なるべければ季節合はず、大津へ越える山中の吟たること疑ふ餘地がない。

句意は説明するまでもない。「何やらゆかし」が一句の生命である。蕙の如き小さな花に心をつけて、憐みいつくしむ所に、芭蕉が自然と一枚になつてゐる大きな力がうかがはれる。「よく見れば薺花咲く垣根かな」と通ふ所がある。「蕙箱物語」には「何とはなしに何やら床し蕙草」となつてゐるが、これは初案である。

『野ざらし紀行』中にある芭蕉の俳句四十五句の中、前に挙げた七句と同質に屬する句は左の二十二句である。同質の句といふのはその形式にも内容にも貞徳や談林の真氣の脱けてゐる蕙風の句といふ意味である。文藝價値の等しい句といふのではない。

秋十とせ却て江戸を指す古郷

- 霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き
- 蘭の香やてふの翅にたきものす
- 蕙植えて竹四五本のあらしかな
- わた弓や琵琶に慰む竹のおく
- 義朝の心に似たり秋の風
- 死にもせぬ旅寝の果よ秋の暮
- 冬牡丹千鳥よ雪のほととぎす
- 明匠のやしら魚白きこと一寸
- しのおさへ枯て餅かふやどりかな
- 市人よ此笠うらふ雪の傘
- 馬をさへながむる雪のあしたかな
- 海くれて鴨の聲ほのかに白し
- 梅白しきのふや鶴を盗まれし
- 櫻の木の花にかまはぬ委かな
- 我がきぬにふしみの桃の雫せよ
- 辛崎の松は花より臙にて
- 茶畑に花見顔なる雀かな

野ざらし紀行の俳句

○いざとも に 穂 麥 食 は む 草 枕
 梅 こ ひ て 卯 の 花 拜 む な み だ かな
 白 け し に は ね も ぐ 蝶 の 形 見 かな
 ○行 駒 の 姿 に 慰 む や どり かな

これは紀行に載つてゐる順に挙げたのである。これ等の句は大體に於て十七音の正調を保ち、二三を除けば大體に於て五七五のものである。これ等の句に就いても一々解説すれば言ふべき事が無いでもないが、○印の九句の如きは句意も平明であり、又特に注意せねばならぬ程の名句でもなく、謂はゞ普通の句であるから、評釋を省くことにする。

秋 十 と せ 却 つ て 江 戸 を 指 す 故 郷

江戸出發の際の吟である。「秋十とせ」は十年といふ程の意。芭蕉が初めて江戸に住みついたのは寛文十二年二十九歳の時で、それから四十一歳の野ざらしの旅までに十二年を経てゐるのだが、約して十年と云つた。故郷は伊賀であるが、十年餘りも江戸に住み馴れてゐて旅に出ると、江戸が故郷であるやうな感じがする。その故郷を離れての旅である。この句は唐の賈島の「度々桑乾」の詩を踏まへてゐる。

客 舍 井 州 已 十 霜。 歸 心 日 夜 憶 咸 陽。
 無 端 更 渡 桑 乾 水。 却 望 井 州 是 故 郷。

賈島の故郷は咸陽だが、十年も住んでゐた井州を離れて更に桑乾の川を渡つて他郷に移つてみると、却つて井州が故郷の様になつかしく感ぜられるといふ。芭蕉が「秋十とせ」といひ「却つて」といふのはこの詩の言葉にすがつたのである。芭蕉の句は賈島の詩の翻譯のやうに見えないでもない。但し賈島の詩を讀んでからの著想ではなく、芭蕉

が旅出の情懷を叙するに當り、平生胸裏に蓄へてゐた賈島の詩句を借りたのである。その本末に依りて句の價値に大きな差の生じることを注意すべきである。

近江路に入りて美濃に至る今須山中を過ぎていにしへ常盤の塚有り、伊勢の守武が
 云ひける義朝殿に似たる秋風とはいづれの所か似たりけん、我もまた
 義 朝 の 心 に 似 た り 秋 の 風

今須は美濃の國不破郡柏原と關原の間にある。山中は今須の東で今關原町の大字である。その山中に常盤御前の墓と稱する五輪塔がある。常盤は源義朝の妾で、牛若丸等三兒の母として有名である。伊勢の守武は荒木田守武で、その獨吟千句の中に

月 見 て や 常 盤 の 里 に 歸 る ら ん 義 朝 殿 に 似 た る 秋 風

といふ附合がある。芭蕉の句の前書にある「義朝殿に似たる秋風」とはこれを指すのである。前句の常盤の里に歸るものは義朝であるとして、秋風も常盤の里に向つて吹いてゐるから秋風は義朝に似てゐるといふ洒落に對して、芭蕉はどの點が秋風と義朝と似てゐるのだらうかと自ら問ひ自ら答へて「義朝の心に似たり秋の風」と吟じたのである。義朝の心の冷酷なところを蕭條たる秋風に喩へたのである。義朝の冷酷な事は保元の亂に戰敗れ降伏した父爲義を勅命とは申ながら命乞もせで郎黨に命じて殺害せしめたるなど著しいものである。この句は「義朝殿に似たる秋風」といふ守武の句を翻案した芭蕉の技巧は認められるし、守武の句に對して芭蕉の句が質的に優れてゐることも認められるが、かういふ作句態度に私は敬伏したくない。

大垣に泊りける夜は、木田が家のあるじとす。武藏野を出る時

野ざらし紀行の俳句

野ざらしを心におもひて旅立ちければ、

死にもせぬ旅寝の果よ秋の暮

木因は美濃大垣の人、谷善太夫と稱し、船問屋を業とし、杭瀬川に別荘を持つてゐて、杭瀬川の翁とも呼ばれた。北村季吟の門下で、芭蕉と同門の誼があつた。芭蕉は江戸首途の時には、野ざらしになる事ゝ覺悟してゐたが、行脚の月日を重ねて、かうして親しい俳友の家で旅寝することよと、無事の身を顧みての感懐である。秋の暮は普通は秋の夕暮の意であるが、こゝでは暮秋と同じく秋の末の意に用ひてゐる。かうした用ひ方も有るのである。「野ざらしを心に」の句と對照して感が深い。

桑名本當寺にて

冬牡丹千鳥よ雪のほととぎす

本當寺は本統寺が正しく、桑名町にある眞宗大谷派の寺院である。「笈日記」には「古益亭」といふ前書がある。古益亭も本統寺の境内である。本統寺の庭に冬牡丹が咲いてゐた。たま／＼雪が降つてゐた。折しも千鳥が啼いたといふやうな時に出来た句であらう。牡丹の咲く初夏の頃には時鳥の啼くものだ。今咲いてゐるのは冬牡丹だから、千鳥の聲を時鳥の聲と見立て、「雪のほととぎす」と興じたのである。冬の時鳥といふものは居ないのだが、藤原定家の難題七首の中に

深山には冬も鳴くらん時鳥玉散る雪を卯の花と見て

といふ和歌がある。降る白雪を卯の花と見立て、卯の花の頃だから時鳥も鳴くであらうと興じたのである。

又木下長嘯子の虚白集に

鉢叩曉がたの一聲は冬の夜ながら鳴く時鳥

これは鉢叩の聲を時鳥に見立てたのである。何れも眞の時鳥ではない。芭蕉はこれ等の和歌から感起して「雪のほととぎす」と云つたのであらう。餘りに理智的で、詩美が乏しい。芭蕉としては技巧過ぎてゐる。しかし貞徳でもなく談林でもない。

因にこの句碑が二鳥塚といふ名で、「諸國翁墳記」に出て居り「勢州桑名驛ニ在、杉夫建」と記してある。その句碑の所在が分らなくなつたので、桑名の小林雨月氏の篤志に依つて本統寺境内に建碑され、昭和十二年四月廿五日落成式が行はれた。

京にのぼりて三井秋風が鳴瀧の山家をとふ

梅白しきのふや鶴を盜まれし

「熱田三歌仙」には「みやこにあそびて題秋風之梅林」と前書がある。秋風は「諺家大系圖」には名は時次とある。京都の富豪で、鳴瀧に山莊を構へてゐた。鳴瀧は仁和寺の西で、今は京都市右京區に屬し、幽邃閑靜の一區境であつた。秋風はもと高瀬梅盛の門に貞徳風の俳を學んだが、後には談林に歸して一時は奇激な句を作つた。素外の「玉池雜藻」に秋風の句とて

右は山左は園飾シ梅シ曙シ

の如き異躰の句を擧げてゐる。秋風は天和二年に俳書「打曇砥」を編し、宗因の句を巻頭に載せて談林傾倒を示してゐる。芭蕉が秋風を訪問して「梅白し」と吟じた折にも秋風は「杉菜に身磨る牛二つ馬一つ」と脇を附けてゐる。この脇句の體にも談林の餘習がある。

野ざらし紀行の俳句

芭蕉は秋風居に梅花の多きを見て、彼の西湖の孤山に隱棲して古を好み榮利に趨らずと謂はれた宋の林逋（和靖）の高潔に比し、林逋は梅を植ゑ鶴を畜ひ、常に梅を妻とし鶴を子とすと云ひしに、この秋風居に鶴の見えないのは昨日あたり鶴を盗まれたのであらうと、挨拶の心情を叙べて「梅白しきのうや鶴を盗まれし」と吟じたのである。素堂はこの句を譽めて「すみれ、むくげの句の下に立たんこと難かるべし」と云つてゐるが、この句は秋風に對して過褒の感が無いでもない。この點でこの句は問題を起してゐる。

【去來抄】に

去來曰、古藏集に此句をあげて先師（芭蕉）の事をなちり、此句へつらへりといへり。是等は物のこゝろを辨へずして評せり。秋風は洛陽の富家に生れて、市中を去山家に閉居して詩歌をたのしみ騷人を愛すと聞て、かれに迎へられ實にかれを風語の隱逸人とおもひ給へる文作ありしが、いかゞありけむ其後招けども行給はず。今や此評を見るに、かれが倭語なることを知れり。（安永四年の去來抄に據る、芭蕉句選年考引く所と少異あり）

去來は大いに憤慨してゐるが、古藏集を見るに、一とせ桃青なる瀧の秋風へ行かれし時、山家の景を仙境にほめて

梅白しきのふや鶴をぬすまれし

とのみにて、別に芭蕉をなじりてへつらへりといへる言葉なし。去來の思ひ誤りであらう。

なほ林逋は有名な「疎影横斜水清淺。暗香浮動月黃昏」の作者である。「世説新語補」に

林逋孤山に隱居す。常に兩鶴を畜へ、之を従ては則ち飛んで雲霄に入り、盤旋之を久しくして復籠中に入る。逋小艇を泛べて西湖の諸寺に遊ぶ。客の逋の居る所に至る有れば則ち一童子門に應じ客を延いて坐せしめ、爲に籠を開きて鶴を縱つ。良久しくして逋必ず小船に棹して歸る。蓋常に鶴の飛ぶを以て客至るの驗と爲す。（原漢文）

其日のかへき、ある茶店に立寄けるに、てふと云ひける女あが名に

發句せよと云ひて、白きまぬ出しけるに書付侍る。

蘭の香や蝶の翅に薫す

芭蕉が神宮參拜の後、西行谷に遊びての歸途、ある茶店に休らひしに、その家のでふといふ婦人が、私の名の蝶に因んだ發句を書いて欲しいと望んだ。芭蕉がそれに書附けた發句である。この時の經緯は土芳の「赤草帚」に委しく出てゐる。

この句はある茶店の片はらに道やすらひしてたゞすみありしを、老翁を見知り侍るにや家に請じ、家女料紙持出て句を願ふ。其女のいはく我は此家の遊女なりしを、今はあるじの妻となし侍る也。先のあるじも鶴といふ遊女を妻とし、其比難波の宗因此處にわたり給ふを見かけて句ねがひ請たると也。例おかしき事までいひ出てしきりにのぞみ侍れば、いなみがたくて、かの難波の老人の句に「葛の葉のおつるの恨夜の霜」とかいふ句を前書にしてこの句遣し侍るとの物がたり也。其名をてふといへばかくいひ侍ると也

「笈日記」には「美人の圖」とあれば、美人であつたのであらう。句は美人としての句が高い。「薫」は沈香、檀香龍腦などの細末を蜜にて煉り合はせたもので、煉香ともいふ。それを焚きて衣などにその香りを籠めることを「たきものす」といふ。句意は、なまめかしい蝶が、美しい羅衣のやうな翅をひろげて、芳香馥郁たる蘭の花に宿つてゐる。蘭の香りが蝶の翅にたきものするやうで、奥床しい、といふのである。女の名の蝶に因みて、立どころに作つた句として、優艶にして而も卑俗でなく、芭蕉の句として異彩あるものである。芭蕉が閑寂枯淡のみの作者でなく、かうした方面にも情熱の缺けてゐないといふことが味はれる。

大和の國に行脚して、葛下の郡竹の内といふ處は、彼千里が舊里なれば、日ごろとどまりて足を休む。藪の奥に家あり。

綿弓 や 琵琶 になぐさむ竹の奥

千里は大和の國竹の内村（現今北葛城郡磐城村竹内）の産、江戸淺草に住んで芭蕉門下の俳人、野ざらし紀行の旅には江戸から芭蕉と同行して郷里竹の内に歸省した。その千里の家を芭蕉が尋ねて暫く足を止めた。千里の舊宅は今も残りて、大疊の一室は當時のままだと傳へられてゐる。少し離れて奥に藪があり、藪を隔て、他の民家がある。芭蕉の句は、千里の家に滞在中、裏藪を隔てた家から綿弓の響き來るのを聞いての作であらう。

綿弓は線綿を打ち弾きて、打綿とする具で、小さき槌にて弦を弾けばびん／＼と響く。「近代世事談」に「明暦年中中華の人、木弓を以て木綿を打事を長崎の人に傳へて、はじめてこれを作る。長さ五尺ばかり、鯨の骨を以て弦とす。小さき槌を以てこれを弾くに、一日の間綿十五斤二十斤を打つ也。その昔は小さき竹の弓をして、半斤ほどの綿を一日の所作とす。」とある。句意は藪の家で打つ綿弓の音が藪づたひにひびいて、琵琶を聞くやうなおもひがして、大いに旅情を慰めて呉れるといふのだ。藪の奥と云はずに竹の奥と云つたのは、清爽な感じがしてよい。現代なら、「綿弓を」といふ所を「綿弓や」と云つたのは含蓄があつてよい。片山家の鄙びた情緒がよく出てゐる。なほこの句の眞蹟は今も竹の内の某家に傳はり、それには文章が附いてゐる。

伏見西岸寺任口上人に逢ひて

我がきぬに伏見の桃の雫せよ

西岸寺は現京都市伏見區深草町にある。眞宗本派の寺院任口は西岸寺第三世寶譽上人、松江維舟門下である。芭蕉

訪問の翌貞享三年四月十日に歿した。享年不明だが、餘程の高齡であつたらしい。伏見は桃の名所であつた。芭蕉は自分の衣に、桃の花の雫を落して欲しい。我が粗末な衣を花の雫で潤したいと望んだのである。句の裏には、任口上人 御徳化に潤ひて、凡俗の身心を清めたいとの意を含めてゐる。謙虚な心持の溢れた句である。西岸寺の任口と、藤堂任口とがよく混同されてゐる。藤堂任口は伊勢の久居五萬石の藩主で、佐渡守高通といひ、北村季吟に俳諧を學んだ。この人は元禄十年八月九日に、享年五十四で歿してゐる。

此情予に告げていはく、圓覺寺の大願和尚今年臘月の初遷化し給ふよし、まことや夢の心地せらるゝに、先づ道より其角が許へ申遣しける。

梅こひて卯の花拜むなみだ哉

文中の「此僧」とは伊豆の國蛸が小島の沙門で、行脚中芭蕉の後を追ひて道連となつた人、芭蕉が「いざ共に徳妻喰はん草枕」と云つ 僧である。大願和尚は鎌倉圓覺寺の住持、其角少年の頃詩易を學び參禪の師である。大願は俳句も作り幻呀と號して「虚栗」の巻頭に

禮者 蔽門しだ暗く花明かなり 幻呀

と出てゐる。その大願が今年正月の初に遷化したことを行脚僧から聞いて、芭蕉は取敢ず其角の許へ弔句を送つたこの時の芭蕉の手紙が、其角の「新山家」に載つてゐる。

草枕月をかさねて露命恙なく、今日歸庵に赴き、尾陽熱田に足を休むる間、ある人我に告げて、圓覺寺の大願和尚今年臘月の初め、月まだ仄暗きほど、梅の匂ひに和して遷化し給ふ由、こまやかに聞え侍る。旅といひ無常と云ひ悲しさ限りなく、折節のたよりに任せ、先づ一輪机右に投ずる而已。

野ざらし紀行の俳句

梅戀ひて卵の花拜む涙かな

はせを

四月五日

其角雅生

又其角が新山家に記す所に従へば、大願は圓覺寺開山より百六十三世にして、貞享二年正月三日に、五十五歳で歿したのであつた。大願和尚は梅花の咲く睦月の頃亡くなられた。それを聞いたのは卵の花の咲く卯月である。梅花の如く高潔だつた和尚を戀しく念ふにつけ、梅花の如く白く咲いてゐる卵の花を和尚の佛と崇めて、和尚の靈に禮拜すれば、涙こぼるゝばかりである。句意は大體かやうなものである。梅花も卵の花も、こゝでは和尚を象徴してゐる。梅と卵の花の客觀美と、和尚を追慕する主觀美とが渾然として、一句を表現してゐる。芭蕉獨得の句境である。

杜國に贈る

白芥子に羽もぐ蝶の形見かな

杜國は名古屋の人、南彦左衛門、壺屋平兵衛と稱す。米穀商を營み藩公の米券を扱ひしといふ。芭蕉等と一座の連句が「冬の日」に載つてゐる芭蕉は杜國の才華を愛した。この句は杜國に別れを惜しんで切々の情を叙してゐる。杜國を清麗な白芥子に喩へ、自分を所定めぬ胡蝶に比し、白芥子に宿つてゐた蝶が、花に別れを惜しむの餘り、形見にとて自らの翅を採いで残したいと思ふにも類ふべき別れであるといふのである。情熱の深く満へられた句である。芭蕉に如此鍾愛された杜國は、貞享四年の芭蕉の「笈の小文」の行脚の時には事に坐して三河の伊良胡岬のほとり保美の里に謹慎してゐた。それを知つた芭蕉は鳴海より二十五里後戻りして杜國を慰め、又うち連れて吉野に旅した。

明ばのや白魚白きこと一寸

「笈日記」には「濱の地蔵に詣して「雪うすし白魚白き事一寸」此五文字口滑りとして、後に明ばのとも聞えしも有り」と云つてゐる。桑名の海濱にての吟である。この句初案は上五を「雪うすし」としてゐたが、後に「明ばのや」と改作したのである。雲泥の差である。白魚は春の季物であるが、この句は桑名本當寺で「冬牡丹千鳥よ雪のほとぎす」と詠じた次に出てゐて、冬の句としての作である。

明ばの、海邊で、漁師が四手かなかで網してゐる。白魚のまだ一寸ほどなのが、勢ひよく跳ねてゐる。その濺刺たる状が如實に現はれてゐる。たゞ客觀のみでなく作者の心情のうかゞはれる句である。明ばの、廣大なる天地を背景として、まだ小さい白魚の世界が、くつきりと描き出されてゐる。「白魚白き」と白を疊みかけたのもよい。明ばのといひ、白魚といひ、すべてが淨化されてゐて、すがすがしい感じがひし／＼と迫る。

「一寸」は「いつすん」と訓むべきか「ちよつと」と訓むべきか、多少疑問とされてゐるやうだが、無論「いつすん」である普通春の白魚は「天然二寸魚」など謂はれてゐるから、冬の白魚を現はす爲に「一寸」と云つてゐるのである。又「いつすん」と云へば語調も引き緊る。活きてゐる白魚は「ちよつと」「白いのが普通だから「ちよつと」いふことは無用の説明に墮する恐もある。素堂の評に「桑名の海邊にて白魚白きの吟は、水を切つて梨花となす潔きに似たり。天然二寸の魚といひけんも、此魚にやあらむ」と云つてゐることも参考になる。天然二寸魚は杜甫の詩句である。

海暮れて鴨の聲ほのかに白し

「笈日記」には「尾張國熱田にまかりける頃、人々の師走の海見んとて舟さし出て」と前書がある。熱田の海邊の冬けしきである。芭蕉時代の熱田は「宮」と云つて、海に接近してゐた。冬の海やうやく暮れて、蒼茫たる沖から鴨の

野ざらし紀行の俳句

聲がほのかに聞える。その聲をほのかに白いと感じたのである。黄色い聲などいふ如く、目に見えない聲を目に見るやうに感じるのは、聽覺の洗練された微妙の感覺である。若し「海暮れてほのかに白し鴨の聲」と云へば低調になるし、且つ海がほのかに白といふ視覺的の凡句となる。「鴨の聲ほのかに白し」で生きる句である。調子の變つてゐることが、この句の特色であり、良いところでもある。

辛 崎 の 松 は 花 より 臙 に て

辛崎は唐崎とも書く。その孤松は近江八景の隨一として名高く、天正十九年に新庄駿河守直頼が植えたもので、『東海道名所圖會』には「株の圍五尋、高三丈餘、數千の枝葉四方へ繁りて、あるは社頭へ靡き、あるは湖上へ秀、遠く眺れば翠巒の如く、近く視れば蟠龍に似たり。四時蒼々として君子の操を顯し、霜雪を凌で千歳を庸とす。云々」と云つてゐる。この松大正十五年に枯死して今は植繼の松であるが、芭蕉時代には鬱々蒼々たる巨樹であつた。明和版野晒紀行や雜談集には、前書が「大津尙白亭にて」となつてゐる。大津から辛崎の松が、日中なら兎に角濛々たる朧月夜には眺め得られまいと思ふ。芭蕉は朧夜に興を催ふして湖畔を逍遙しつゝ辛崎に至り、或は孤松の附近に目を暮らしての吟であらうと思はれる。

照りもせず曇りも果てぬ朧月夜の巨松の風姿に恍惚として、口を衝いて「辛崎の松は花より臙にて」と自ら洩れ出た句である。蒼々鬱々と蟠つてゐる辛崎の松なればこそである。蒼茫たる湖水の中に突き出てゐる松で、背景としての湖水が渺々たる臙の感じを強めてゐることも、この句を生かす上に力を添へてゐる。元より朧夜の花が悪いといふのではない。優劣の問題ではない。この場合松の臙が花の臙よりも朧夜の趣を深めてゐると感じたのは芭蕉の主観である。辛崎の巨松に漂ふ客観としての臙と、芭蕉の心裡に動く主観としての臙とが、一如となつてこの句が現はれる。

た。なほ尙白の「孤松集」には、この句の坐五が「臙かな」となつてゐるが「臙かな」と云ひ切ては、芭蕉の氣持が現はれぬ。「臙にて」と未完結の形でなければ餘情がない。

この句は「臙にて」となつてゐて、一句の中に所謂切字が無いことが、芭蕉門下の人達に問題を起した。この句の「にて留」になつてゐる點が、連句の第三句目の「にて留」と同格なれば、これは連句の平句であつて、發句とは爲し難いといふのである。それにつき「去來抄」に其角、呂丸、去來等の意見が出てゐる。作者芭蕉は「其角、去來が辯皆理屈なり。我はたゞ花より松の臙にて面白かりしのみなり」と云つてゐる。花よりも松が臙にて面白かつたといふ芭蕉の主観は實景實感から生れてゐるので、あらゆる理屈を超越してゐるのである。又其角の「雜談集」に、

伏見にて一夜俳諧催されけるに、傍より芭蕉翁の名句何れにや侍ると尋出でられけり。折節の機嫌にては大津尙白亭にて「辛崎の松は花より臙にて」と申されけるこそ一句の首尾言外の意味、近江の人未だ見殘したるなるべし。……又傍より……其句誠に俳諧の骨髄は得たれ共句中儘なる切字なし。凡て名人の格的には左様の姿をも發句と許し申すにやと不審しける。(略)此論を再び翁に申述べれば、一句の問答に於ては然る可し。但予が方寸の上に分別なし。云はゞ「蓮や眞野の入江に駒とめて比良の高嶺の花を見る哉」只眼前なるは、と申されけり。

芭蕉は理屈は兎も角、只眼前の實景を心に感じるまゝに表現したといふのである。尙支考の「古今抄」にもこの句に就いて長々と記してゐれど、こゝに引用する必要はない。又「俳諧一葉集」に「或人師のから崎の句に切字なき事を其角に難す。其角句意と切字のことを説て後に、師に句意を尋ぬるに、翁曰我は切字の有無と意の淺深を案じて作したる句にあらず。只眼前の實景盡きなせども及ばず。毛髮これが爲に動き、覺えず此句をなす。工みたることなき故、句意と切字とは我これをしらすと也。」

野ざらし紀行中の芭蕉の句には、談林調の名詞を留めてゐるものが相當にある。それは主として字餘りの形式に於てである。内容上には最早談林風の如き遊戯的なものは認められないが、形式上にはなほ

芭蕉野分して鹽に雨を聞く夜かな
夜着は重し吳天に雪を見るあらん

の如き過渡期の餘弊が残つてゐる。十八音以上の字餘りの作がすべてに於て十四句ある。即ち十八音が三句、十九音が七句、二十音が三句、二十一音が一句である。

字餘りは蕉風體 句に於ても絶對に許容されぬといふのではない。

黄菊白菊 そのほかの名は無くもがな 嵐 雪

など著名な作もある。どうしても字餘りにせねばならぬ場合には、十七音の定型を破ることも止むを得ないのであるが、それは極く稀であつて、蕉風の句に於ては十七音を定格としてゐる。前に云つた芭蕉の十五句中には、蕉風の吟として許容すべきものと、然らざるものがある。それは観る人に依つて多少の異見があらうけれど、私は私一箇の考へによつて判断したいと思ふ。

草枕 犬もしぐるゝか夜の聲 (十八音)

名古屋にての吟である。草枕は草を枕に旅寝すること、旅の枕詞として用ひられ、又旅寝の意となり、旅行の意にも用ひられる。芭蕉がある宿に旅寝してゐて、折からの時雨の音を淋しんでゐると、戸外で啼き立てる犬の聲が聞えて一入旅寝の侘しさを感ぜ、あの犬もしぐれて淋しいのであらうと、犬の上に想ひを馳せたのである。「しぐるゝか」の「か」は疑問詞ではあるが、疑の意は軽く「犬もしぐれてゐるのであらう」と想像してゐるのである。そして犬を

憐むの情が溢れてゐる。芭蕉と犬と相對的でなく、芭蕉と犬と一如の感じが現はれてゐる。芭蕉の句には對象を客觀的に寫生してゐるのでなく、對象の客觀と作者の主觀とが一如となつてゐる句が多い。この句は日常ありふれた事件を扱つてはゐるが、作者の感情が強く動いてゐると、表現が旨い爲に佳作となつてゐる。なほ「犬もしぐるゝか」と八音にした爲に感動の氣持がよく現はれてゐる。若し「旅の宿犬もしぐるゝ夜なりけり」とでもしたなら、凡作となる。この句は字餘りが頗る効果的である。

卯月の末、庵に旅のつかれをほらすほどに

夏衣 いまだ風をとりつくさず (十八音)

史邦の『芭蕉庵小文庫』には「卯月のはじめ庵に歸りて旅のつかれをほらす程に」と前書がある。「卯月のはじめ」となつてゐるが芭蕉の自筆と云はれてゐる甲子吟行の「卯月の末」に従ふべきであらう。この句は野ざらしの旅を終りて、貞享二年四月の末に江戸深川芭蕉庵に歸り着いた時の即吟である。前年より約九箇月の長途の行脚を続け、しかも草枕の侘しい月日を重ねての旅の勞れの氣分がこの一句に結ばれてゐる。夏衣は單衣である。「いまだ風を取りつくさず」と率直に云つたのがよい。一茶の風には不潔を感じるが、芭蕉の風にはその感じのないのが不思議である。「取りつくさず」と六音に云つたのも自然的であつて、字餘りの侘屈さがない。野ざらしを心に首途した芭蕉が、大垣で「死にもせぬ旅寝の果よ秋の暮」と詠じ、遂に深川の草庵に歸つて夏衣の句を詠んだ。この句には長途の旅の疲れと歸庵の安心とが出てゐる。

二上山當麻寺に詣で、庵上の松をみるに凡そ千とせもへたるならむ。大いさ牛をかくすとも云べ
けむ。かれ非常(情)といへども佛縁にひかれて、斧斤の脚をまぬかれたるぞ、幸にしてたつとし。

僧 朝 顔 幾 死 か へ る 法 の 松 (十八首)

芭蕉句選年考には「いく死かへり」としてゐるが出典を挙げてない。「幾死かへる」が宜しい。常麻寺は大和國北葛城郡常麻村にある舊刹で、聖徳太子の御弟麻呂子皇子の創建で、初めは河内の山田に建立されたが、天武天皇白鳳二年に、二上山の東麓に移されたのが今の常麻寺である。中將姫感得の蓮絲曼荼羅で有名である。千里の舊里竹内から僅か数町北に當る。

前書にある庭上の巨松は益軒の和州巡覽記に「本堂の下に大いなる古松有。根南北に長くして東になし、怪松なり」と云つてゐる。芭蕉は益軒より十年ばかり前に常麻寺に参つたのだから、芭蕉の見たのも同じ松に違ひない。大和名所圖會には中之坊の前に一松を畫き「ていこ松」と記し「古松」としてゐるのは矢張この松と思はれるが、いつしか枯れて今は無い。芭蕉が「大いさ牛をかくすとも云べけむ」と云つたのは、莊子の人間世篇にある「匠石之斲、至乎曲輪見之樸社樹、其大蔽牛。斲之百圍、其高臨山」とある語を用ひたのである。

この句は難解に屬する。それは言葉を省略し過ぎた爲である。この句の季題は朝顔であるが、芭蕉は當寺で千年の古松を見、又末枯れながらに咲き萎れてゐる朝顔を見、又寺僧に逢つて、それ等を綜合してこの一句にまとめた。

「僧朝顔」は僧と朝顔であつて、この二者を比べてゐる。朝顔は朝に開いて午に凋み、日々咲き代り咲き代り、年々咲きかへり咲きかへりする。僧もまた前住後住死かへり死かへりする。それ等も佛陀の慈愛ではあるが、天壽限りありて千年の壽は保ち難い。松は心なきものなれど、寺の境内に生ひたる古松は千年の壽を保ち、牛をかくすほどの大いさに榮えてゐる。情なき松ではあるが佛祿の御蔭で、伐採の禍を免れてゐるのは仕合である。佛法の徳を宿してゐる松だから、法の松と稱へたのである。或は朝顔は僧に譬へ、松は佛法に譬へて、僧は朝顔の如く果敢ないが、佛法

は松の如く永久に榮えろといふ解説もあるが、私は採らない。兎に角この句は理窟的で、詩情が乏しい。

因みに十餘年前、大和高田の曼荼羅會が發起して、常麻寺内中之坊の庭前に「僧朝顔」の句碑を建設した。

獨よし野のおくにたどりけるに、まことに山ふかく云々、ある坊に一夜をかりて

礎 打 ち て 我 に き か せ よ 坊 が 妻 (十九首)

續虛梁には「よしの、奥に夜あかして」と前書あり、又曠野には「よしのにて」の前書で「きぬたうちて我にきかせよ坊がつま」となつてゐる。曠野は元祿二年の板行であるから、野ざらし紀行の旅から五年後に當る。芭蕉の再案か。この「や」がある爲にこの句の強い寂寥感が人に迫る。やを除いたので感動の深さが非常に違ふといふ説もあるが、私は反對である。やがあつては諷刺調の浮きくした趣味がある。「や」を除くとすつきりして強みが増す。

參議雅經の「みよし野の山の秋風小夜更けてふるさと寒く衣打つなり」といふ和歌がある。芭蕉の句はこの和歌を踏まへての作である。礎は礎とも書く。糊附けた布帛などを槌にて打ちて和ける爲に用ひる。木又は石の臺である。多く防寒の冬衣を搗つ故に、礎は秋の季題となつてゐる。芭蕉は吉野の奥にてある僧坊に宿りて、雅經の歌など心に浮ぶまゝに、坊が妻よ碯うつて聞かせよと口ずさんだのである。元より口ずさんだまゝ、坊が妻に直接に頼んだわけではなかつたらう。「師走囊」にこの句の坊を僧坊の意に解してゐるのを『説叢大全』に痛く難じて「僧坊に妻あらんや、一向妄語不可用也」と云ひて坊は吉野の町家の意に解し「句解」にも「吉野の入口に軒をならべて旅客ととむる家居なり」と解してゐる。されど吉野には櫻本坊、喜藏院、竹林院などいふ妻帯の寺坊ありて、旅客を止宿せしめ今も山上参り(峰入)の講中などを宿泊せしめること、旅館同様である。あつみ山歌仙に「此の世の末はみよし野に入る」といふ不玉の前句に「朝つとめ妻帯寺の鐘の聲」と會良が附けてゐる。この妻帯寺は吉野の僧坊であ

る。

西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方二町計わけ入るほど、榮人のかよふ道のみわづかに有て、さかしき谷をへだてたるいとたふとし。彼とくくくの清水は昔にかはらずとみえて、今もとくくくと零落ける。

露とくくく心みに浮世すゝがばや (十九首)

西行上人は出家の後三年の間、吉野の奥に隠棲して、年々の花を樂んだと傳へらる。その跡とて記念の小庵が結ばれてゐる。寛文十一年刊の『吉野山獨案内』に「奥の院四方正面祕佛の堂あり、山の祖を二町程行苔清水といへる名水あり、此ほとりに西行庵室をむすばれし、その跡に小堂を立て、彼の法師の御影有」と載せてゐる。益軒の和州巡覽記にも、ほと同様の記事がある。芭蕉は西行の遺跡を慕ひて、苔清水を尋ねた。「彼とくくくの清水」と云つてゐるのは苔清水の事である。西行の歌と傳へられてゐる「とくくくと落つる岩間の苔清水汲みほすほどもなき住居かな」といへるによりて、とくくくの清水とも謂はれてゐる。この歌は西行の山家集にも見えず、されど吉野獨案内にも西行の詠として載せ、芭蕉も素堂も其角も、西行の作と信じてゐたのである。

「露とくくく」の露は秋の季候を現はす爲であり、尚苔清水は至つてさゝやかな流れである爲にそれにもひとかせてある。とくくくはぼたりと落ちる形容である。西行の歌にも詠まれたとくくくの清水は實に淨潔である。試みに之を飲んで、浮世の塵垢に汚されてゐる自分の俗腸を洗ひ雪ぎたいといふのである。一説露にははかない身の上に掛けてゐるといふが、そこまでは言はぬがよからう。又とくくくは疾く疾くに掛けてゐるといふがそれも宜しくない。しかしその様な曲解の生じるのは、この句の弱點であつて言葉遣ひに無理があるからであらう。

素堂の評に「またとくくくの水にのぞみて、洗ふにちりもなからましをこゝろみにすゝぎけん。此翁年ごろ山家集をしたひて、をのづから粉骨のさも似たるをもつて、とりわき心とまりぬ。おもふに伯牙の琴の響、こゝろざし高山にあれば嘖々ときこへ、こゝろざし流水にあるときは、流るゝごとしとかや。我に鐘子期が耳なしといへども、翁のとくくくの句をきけば、眼前岩間を傳ふしたゝりを見るが如し」と云つてゐる。素堂は痛く共鳴してゐるが、私はさほどの句とは思はれぬ。しかしこの句が字餘りになつてゐることは無理でないと思ふ。芭蕉句選年考には、此句の初案だとして「こゝろみに浮世すゝがん苔清水」を擧げてゐるが、それは夏季でもあり、凡作でもある。

水口にて二十年を経て故人に逢ふ

命 二二つの中に生たる櫻哉 (十九首)

『孤松』には「逢故人」と前書あり、『熱田三歌仙』には「二十年を経て古友に逢ふ」とある。故人といふのも舊友の事である。水口は近江甲賀郡にある宿場で、東海道五十三次の一つである。芭蕉は此處で舊友に逢うた。『芭蕉翁全傳』に依れば、その人は上野の藩士服部半左衛門土芳であつた。

些中庵土芳、其頃は蘆馬と稱す。此春播磨にありて歸る頃、翁ははや此國に出られければ、跡を慕ひて京に上る水口の驛に往あひて、同じ旅ねの夜すがら語りあかすとて、

命 ふたつ中に活たる櫻かな

と記してゐる。土芳は後に隠棲して俳道に精進し、三草紙養蠱庵集など、有益な俳書を著した。今上野に残つてゐる養蠱庵は土芳の隠宅であつた。二十年前と云へば寛文六年で、芭蕉二十三歳の時であり土芳は僅に九歳で甚だ都合が悪い。しかし此の時水口で二人が出逢つた事は土芳の養蠱庵集にも、土芳がこの時の思出を夢に見た記事がある。

野ざらし紀行の俳句

曉夢に師にまみゆ。此所は往還にして旅人多し。貞享のむかし水口にて行あひ、それより美濃尾張の方に趣、驛の東の出来まで見送り別れたるあたりか。又は高野の麓のやうなるとおもはるゝ事も有。夢ながら此わかれいかなる事か、供する人もなかりしに、少し立さがり今ひとり顔も見ず。往來の旅人に埋ていとほいなし。

と云つてゐるから、二人の會見を否定することは出来ない。芭蕉が「二十年を経て」と云つたのは大まかに概数を擧げたのであらう。此の句全傳には「命ふたつ」となつて居り、泊船集も菊の香も同様である。又「生たる」が「活たる」となつてゐる。古俳書には句の途假名が省略されてゐることが多いので、誤讀される恐がある。「生たる」は「生きたる」か「生けたる」か、それに依つて句意が違ふ。「活たる」にしても同様である。從來の句解も二様になつてゐる。許六の「自得發明辨」に「風國が菊の香集に、命二中に活けたるさくら哉、是は文字餘りにて、命ふたつと有り。予芭蕉庵にて借用「舛枕」(野ざらし紀行)に體にのゝ字入りたり。のゝ字入りて見れば、夜の明けたるが如し。知らざるは是非なし」と云つてゐる。「命二つの」が良いと思ふ。

命二つといふは西行の「命なりけり小夜の中山」と云つた命なりけりの命であつて、二十年も離れてゐた二人が、かうして久々に出逢つたのは、命ありたればこそである。まことに奇しき邂逅である。久淵を叙してゐるその二人の間、櫻は活き／＼としてゐる恰も二人の悦びを悦んで呉れてゐるものゝやうにほゝんでゐる。といふ意味に思ふ。

櫻は花瓶に挿してあつたのであらう。「中に」と云つても、必ずしも二人對坐の間でなくともよい。牀に活けてあつてもよい。二人會談の席の和やかな雰囲気が出ればよい。櫻は二人の和やかな情緒を象徴したものである。良い句とおもふ。

富士川のほとりを行くに、三つ計なる捨子の哀げに泣有。この川の早瀬にかけてうき世の波を

1.3 3

しのぐにたえず。露計の命待つまゝと捨て置けむ。小菰がもとの秋の風、こよひやちるらん、あすやしほれんと秋より噴物なげるとほるに、

猿を聞く人捨子に秋の風いかに (十九番)

この句に就いては、前に野ざらし紀行概説の中でも觸れておいた。句意は猿の叫ぶ聲は悲しいものだが、それを聞いて斷腸の思ひがする人たちは、この秋風蕭々たる中に捨子の泣き叫ぶ聲を聞いたら、どんなに哀れな情を起すであらうか。それはいふまでもない、といふのである。猿の聲を悲ぶ詩歌は多い。杜甫秋興詩に「聽猿實下三聲淚」の句あり、白樂天舟夜贈内詩に「三聲猿後垂鄉淚」といふ句があり、又荊州記には「巴東三峽巫峽長。猿鳴三聲淚沾裳」とあり、本朝文粹には江澄明の「胡雁一聲秋破。商客之夢。巴猿三叫曉霜。行人之裳。」の句がある。

「猿を聞く人」と七音にしたのは止むを得ないことではあるが、雅馴ではない。尤も猿の聲を聞くと云はずして、それと解ることは老功である。この句沾徳の一字幽蘭集には、「猿をきく世」となつて居り、明和版の野晒紀行には「猿を聞捨子を秋の風いかに」となつてゐるが、何れも宜しくなす。

この句には後書があつて、「唯これ天にして汝が性のつたなきを泣け」といふ冷酷に聞える言葉があるの、芭蕉の人格を云々する非難の説もあるが、それに就いての私の意見は、既に野ざらし紀行概説の中に述べておいた。素堂の評にも、

富士川の捨子は惻隱の心ぞ見えける。かゝるはやき瀬を枕としてすて置けん、さすがに流よとはおもはざらまし「身にかふる物ぞなかりきみどり子はやらむかたなくかなしけれども。」とむかしの人のすて心までおもひよせて、あはれならずや。

と芭蕉の心に共鳴してゐるのである。素堂の引いてゐる「身にかふる」の和歌は、西行の作と云はれてゐる撰集抄に、法性寺殿の御所の前に、子を紅梅の衣に包みて「身にまさるものなかりけりみどり子はやらん方なくかなしけれども」と書て捨てたるを、御所にてそだて給ひ、後中將頼實となり、發心して僧正良縁と申しけるよし見えたりとある、それを指してゐる。

廿日餘の月かすかに見えて、山の根際いとくらきに馬上に鞍をたれて數里、いまだ雞鳴ならず。杜牧が早行の殘夢小夜の中山に至りて忽驚。



馬に寝て 殘夢月遠し 茶のけぶり (十九首)

笈日記と赤草紙は前書が少し違つてゐる。杜牧は有名な唐の詩人、樊川と號し、杜甫に對して小杜と稱せらる。早行の詩は「垂鞭信馬行。數里未雞鳴。林下帶殘夢。葉飛時忽驚。云々」である。赤草紙に、

この句古人の詞を前書になして、風情を照す也。初は「馬上眠からんとして殘夢殘月茶の煙」と有を一たび「馬に寝て」と初五文字をしかへ、後又句に拍子有てよからずとて「月遠し茶の煙」と直されし也。

と云つてゐる。三考して良くなつてゐる。しかしまだ生硬な氣持がないでもない。この時代の風である。句は良いと思ふ。

この句は前書の文に助けられて、よくなつてゐる。句の中の馬も殘夢も月もみな杜牧の詩中の語である。けれど句は詩の直譯に終らずして、俳味を保つてゐるのは坐五の「茶の煙」に依るのだと謂はれてゐる。實にその通りだと思ふ。芭蕉はこの朝風起して馬を借り、睡處に襲はれつゝ夢見心地でゐたが、不圖目が覺めると、八月二十日餘りの弦月ほの白く、朝茶の煙淡くたなびいてゐる。その景情を吟じたのである。前書に數里と云つたのは、杜牧の詩の語を

用いたので、日本の里程ではない。

暮て外宮に詣侍りけるに、一ノ華表の陰ほのくらく御燈燈々に見えて、また上もなき峰の松風、身にしむ計ふかき心を起して

三そか月なし千とせの杉を抱く嵐 (十九首)

芭蕉は行き行きて八月晦に伊勢の神宮にお参りした。その時の扮装を自ら記して「腰間に寸鐵をおびず、襟に一囊をかけて、手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵有、俗に似て髪なし」と云つてゐる。半僧半俗の芭蕉は参宮したが、僧侶並にあつかはれて、神前に入事を許されなかつた。當時本地垂迹説によつて一般の神社は僧俗の差別は無かつたが伊勢の神宮に於ては然らず。外宮には第三の鳥居(板垣御門)の前に僧尼拜所あり。内宮には五十鈴川を隔て、正殿に向つて僧尼拜所が設けられて、僧尼、山伏、法體人はすべてそれより内へ進んず拜する事を禁ぜられてゐた。芭蕉は日暮れて外宮に詣で、第一の鳥居の外より伏し拜んだのであつた。それより二の鳥居、三の鳥居、第四の御門、玉串御門、蕃垣御門、瑞垣御門を隔て、御正殿である。これは寛政九年の伊勢参宮名所圖會に據つたのであるが、芭蕉参拜の貞享元年も、大體同様であつたらう。

芭蕉の参つたのは八月二十九日であつた。この月は小であつて二十九日が晦であつた。芭蕉は「みそか月なし」と云つてゐる。「みそか」は「三十日」であるが、陰曆では小の月の晦をも「みそか」と稱へた。夜の事だから僧尼拜所までも入らず、一の鳥居の外から拜んだのであらう。杉の木の間から處々に洩れる御燈を拜んで信を起した。前書に「また上もなき峰の松風」と云つてゐるのは西行の歌「深く入りて神路の奥を尋ねればまた上もなき峰の松風」を指すのである。西行四季物語には「神路山の嵐おろせば峰の紅葉御裳すそ川の流に濃き錦をさらす。ふと御垣の松を

野ざらし紀行の俳句

見やれば、千とせのみどり梢に顯る……ことに月の光も澄みのぼりければ「神路山月さやかなるちかひにて天が下をば照らすなりけり」と詠ん。西行四季物語は二條政家の文で西行の自筆ではないが、西行に私淑した芭蕉はこの物語も読んでゐたであらう。素堂は「ゆき／＼て山田が原の神杉をいだし、また上もなきおもひをのべ、何事のおはしますとはしらぬ身すらもなみだ下りぬ」と評してゐる。内宮にも外宮にも、千歳経る神代杉が多い。芭蕉は陰惨たる杉木立のほとりにひれ伏して心耳を澄ませば、神路山のあたりから吹き下ろす夜嵐は、木立の間を吹きめぐり、千歳の杉を抱くが如く感ぜられる。かたじけなさに涙こぼるゝ思ひであつたらう。雄大な爽涼な句であるが「みそか月なし」は表現形式の上に、説明的になつてゐるのは、どうかと思ふ。それは「みそかに月の無いことは當然であるからであらう。

山を昇り坂を下るに、秋の日既に斜になれば、名ある所々見残して、先づ後醍醐帝の御廟を拜む。

御廟年経て忍ぶは何をしのお草 (十九音)

この句「孤松」には「御廟千とせしのぶは何を忍草」となつてゐるが、恐らく撰者の粗漏であらう。後醍醐帝崩御より貞享元年まで約三百年五十年に過ぎず。「御廟千とせ」と云ふ管がない。「泊船集」には「御廟年を経て」と出てゐる。「と」の一字ありて却つて音調が整ふ。私はこれに従ひたい。

芭蕉は吉野に入りて名所舊蹟などは後に廻して、先づ後醍醐天皇の御廟に参拜した。その至誠純忠を見るべきである。この句の御廟は「こべう」と讀まれてゐるやうだが、私は「みべう」と讀みたい。その方が言葉としても穩當であり、音調のひびきも優雅である。御廟はみたま屋であるが、こゝでは御陵の事である。「しのお草」は種類多く、

こゝでは「軒忍」の事である。順徳院の「百しきやふるき軒端のしのぶにもなほ餘りある昔なりけり」と仰せられたのもそれである。樹皮、岩間又は古屋根などに自生する多年生草本で、根莖は稍強くして横臥し、葉面に小さき黒點を散布する。姫軒忍、深山軒忍、など種類が多い。

後醍醐天皇の御陵に額づけば、年久しきまゝに忍草が伸び蔓つてゐる。忍は古を偲ぶにゆかりのある草だが、何を偲んでゐるのであらうか。南風競はざりし延元の昔を偲んでゐるのであらう。と作者の懐古の情を忍草に託したのである。感慨の深い作で、芭蕉の心情のよく現はれた句である。

第九十六代後醍醐天皇は、延元四年八月十六日吉野の行宮で崩御まし、如意輪堂の背の丘に葬り奉る。御陵は北向に築き、直徑十五間、高さ三間の圓墳で、塔の尾の陵と申し奉る。

戦國時代には歴代の御陵荒廢し、雑人も濫入して樹木を伐採するなど恐れ多きことあり。徳川になりても元祿の頃までは周垣も設けず、勿體なき限りであつた。寛文十一年板の吉野山獨案内の挿圖を見ると、如意輪寺のうしろの丘に「天王ノ御廟」として小さき五輪塔あり、その前に鳥居を畫いてあるのみで、周垣もない。芭蕉の参つたのはそれより十三年後であつたから、大體同じ様式であつたであらう。

西行谷の麓に流あり、おんなどの芋あらふを見るに

芋洗ふ女西行ならば哥よまむ (二十音)

西行谷は伊勢の國度會郡宇治山田市の宇治橋より良の方へ八九町の處にて、西行が一時隠栖せし跡とて、神照寺といふ尼寺があつたが、明治維新後に廢絶した。連歌師宗長が西行の遺跡を訪うたことが宗長日記に見える。芭蕉も西行を慕うてこの神照寺を尋ねたのであらう。この麓の流れにて女たちの芋を洗つてゐるのを見て、西行上人ならかゝ

野ざらし紀行の俳句

る處で歌を讀まれたであらうのにと、ふと口ずさんだ即興句である。西行谷といふ地名からの發想であらう。西行嘗て攝津の江口の里を通りし折村雨の降り來りしに或る宿にて一人の尼板一枚を手にして雨を防ぎかねたる體なれば、西行取あへず「賤が伏屋を葺きぞわづらふ」と口ずさみけるに、かの尼一月はもれ雨はとまれとおもふには」と附けたといふ逸話が撰集抄に載つてゐる。又同じ書に西行が江口の遊君と和歌の應答せし事も見えてゐる。芭蕉これらを下心にして「西行ならば歌よまん」といつたのであらう。西行谷神照寺は尼寺であつたから、その尼僧が芋を洗つてゐたのかも知れぬ。さらば江口の尼を聯想しての作かも知れぬ。句は普通の作である。

長月の初故郷に歸りて、北堂の萱草も霜結果て、今は跡だになし。何事も昔に替りて、はらからの蟹白く眉皺寄て、只命有てとのみ云て言葉はなきに、このかみの守袋をほどきて、母の白髪おがめよ、浦島の子が玉手箱、汝が眉もやゝ老いたりと、しばらく泣きて

手にとらば消えん涙ぞあつき秋の霜 (二十首)

芭蕉は九月の初、故郷上野赤阪町の兄松尾牛左衛門の家に歸つた。芭蕉の母はその前年天和三年六月二十日に永眠して梅月妙松となつた。芭蕉が歸郷したのは亡母の展墓が目的の大なるものであつた。「北堂の萱草も霜結果て、今は跡だになし。」と云つたのは母の逝去した事である。北堂は母の居所であるから、母を北堂ともいふ。萱草は宜男草ともいひ、婦人其花を帯ぶれば男子を産むとて、北堂には萱草を植ゑる。故に母を萱草ともいふ。詩經の衛風伯兮篇に「焉得三諫草、言樹之背。」とある。諫草は萱草と同じく、之を食へば憂を忘るといふ。芭蕉は九年目の歸郷である。兄も芭蕉も髪白く眉皺寄りて、命あればこそとて互に言葉なく、やゝありて兄は守袋をほどきて、亡き母の白髪拜めよ。龍宮から歸つた浦島太郎の玉手箱ではないが、お前も大層年が寄つたと共にうち泣きて、母の形見の白

髪は霜のやうに白い。手に執つたなら、自分の熱、涙で消えるであらう。と感慨に堪へぬ句が出來た。秋の霜は白髪
の比喩である。秋は折からの季節でもあり、又秋の霜は消え易いから用ひた。熱情に富んだ句で、惻々として人を動
かす。

名護屋に入る道の楓風吟ス

狂句 木枯の身は竹齋に似たる哉 (二十首)

熱田から名古屋へ入る途上の吟である。この時名古屋に入つて、この句を立句として、野水、荷兮、重五、杜國、
正平等と歌仙一巻が出來た。この他の四歌仙を併せたものが、俳諧七部集の首巻『冬の日』である。冬の日この句
の前書は、

笠は長途の雨にほころび、帯衣はとまり／＼のあらしにもめたり。侘つくしたるわび人、我さへあはれにおぼえけ
る。むかし狂哥の才士此國にたどりし事を、不圖おもひ出て申侍る。

となつてゐて、よく芭蕉の風貌と心情が伺はれる。泊船集の道の記には「狂句風の」とあり、句集の部には、「こが
らしの身は竹齋に似たるかな」となし、「道の記には狂句こがらしとあり、後に狂句の文字をはぶき給ひしよし」と
記してゐる。芭蕉が後に狂句の二字を削つて正しい句形に改めたのである。櫻下文集にも「狂句」の二字はない。芭
蕉の書簡には「冬の日風の」としたものがあり、當時に於ては、芭蕉はやゝ得意であつたやうだ。意水宛の書狀に、

五文字の長き句世にはやりければ我も人のまねをするとして

冬の日風の身は竹齋に似たるかな

と記し、尙「しづむれにても風流故かおもしろく候。キ様にも此句之類を、御意得候て、一句可被成候」と云つてゐ

る左卯宛の書状にも「冬の日風の」と書き「ケ様に口すまび申候。さて／＼言イにくき物に御さ候。五もじ多き故か、おもしろくも御座候。キ丈にも二三句可被成候。云々」と云つてゐる。秋風宛の書状も大體同意である。露逆宛には「五文字長き句世にはやり申候へば」として「冬の日風の」句を書き「右の句にて御さ候。さのみおもしろくも無し之候へ共、此三四年は五文字之長き句をおもしろがり申候に付如此。さて／＼時々のやり言とて是非もなき事に候愚老などは夢々以おもしろからず候。」とも云つてゐる。この四通の手紙が皆「冬の日風の」となつてゐるのは、諷解しかねるとおもふ。初案は「狂句風の」であつたであらう。それを立句として歌仙が出来た位だから、間違はな筈である。狂句と云つたのは竹齋が狂歌師であつたから、芭蕉が俳句のことを狂句と云つたのである。しかし狂句の二字を句の中に含めるのは、徒に句形を冗長にするだけで句意に益する所が無いことに心づいて、後に狂句の二字を削つたのであらう。赤草紙に「初は狂句がらしの」といへり、後になしかへられ侍る。此類尙多し。皆師の心の動きなり、味ふべし」とあるが真相であらう。

芭蕉は風に吹かれながら名古屋に入る途上、不圖狂歌師竹齋が名古屋に假やどりしてゐた事をおもひ起し、怪つてしたる我が身は古人竹齋に似てゐるだらうと、感慨に耽つたのである。狂句の二字は無論削るべきものである。芭蕉が俳句を狂句と云つたことは他にもある。あなたがち俳句を輕蔑したのではない。俳諧の句といふほどの意味に用ひたのである。風に吹かれてゐる俳諧師の我が身の見すばらしさは、古の狂歌師の竹齋に似てゐるだらうかと、竹齋に似てゐることを自得してゐるのである。

この竹齋といふ人は元和九年（或は寛永十一年）の作と云はれてゐる播大納言鳥丸光廣の「竹齋物語」といふ書中の假託人物である。竹齋は山城の醫師であつたが、藝醫者の京都にも暮し兼ね、一僕「にらみの介」を連れて諸國

を遍歴し、得意の狂歌を詠みつゝ名古屋に來り「天下一やぶくすし竹齋」といふ看板を掲げ、その傍に「扁鵲も普婆も及ばぬ竹齋と知らぬ病家 愚なりけり」と書いておいたが矢張藝醫の評判高く、此處にも住みかねて、一僕と共に江戸の方へ放浪したといふ。この物語が一九の膝栗毛の粉本だらうと云はれてゐる。竹齋が名古屋へ入る時の風體は、日數つもりて清洲の宿、命なごやに着きにけり。さてちいさい町に宿を借り、看板をこそ出しけれ。折ふし冬のことなれば、破紙衣に布裏つけ、帯は木綿の丸くけに、羽織はいかにもすゝびたる紫紬のえりをさしのけ、衣紋にこそ着なしける。

と「竹齋物語」に出てゐる。又竹齋の狂歌に、

秋冬にあきはてゝ世の關越せばまた身に寒き木枯の風
といふのもある。

二たび桐葉子がもとに有て、今や東に下らんとするに、

牡丹薬ふかく分出る蜂の名残哉 (二十一音)

この句は前書も句も諸書相異がある。が、一々列擧するにも及ばぬと思ふ。桐葉は林七左衛門と稱し、熱田市場町に住んでゐた。芭蕉が「旅亭桐葉の主、心ざしあさからざれば」として、「此海に草鞋すてん笠しぐれ」と詠んだことが鞍宮物語に出てゐる。芭蕉前年の冬桐葉亭に宿り、今また桐葉の許に居れば、「二たび桐葉子がもとに有て」と云ふのである。そしていよ／＼江戸に歸るに當りての留別の句が「牡丹薬深く」である。この句熱田三歌仙、鞍宮物語には「牡丹薬分て遣出る」とあり、笈日記には「牡丹しべを分て遣出る」となつてゐるが、留別の句としては「深く分出る」がよい。「深く」が殊に留別の氣分にふさはしい。この句は「牡丹」で一寸中止して「薬ふかく」と讀み一分

出る蜂の名残かな」と一氣に讀みたい。句法も緊密で、字餘りではあるが冗漫の感はない。牡丹は亭主桐葉に喩へ、蜂は芭蕉自らを卑下したので、牡丹と蜂の比、それ〴〵適切である。句意は解するにも及ぶまい。

野ざらし紀行に洩れたる句

野ざらしの旅は貞享元年の八月より二年の四月に亘り、約九ヶ月の長き行脚であつた。この旅中の主なる芭蕉の發句は『野ざらし紀行』に載せられてゐる。けれど、芭蕉が旅中に作つた句は唯それだけでなく、なほ若干句は『野ざらし紀行』以外に他の撰集などに依つて残つてゐる。

尤もそれらの句の中には製作時期のはつきりしないものがある。一體芭蕉のすべての俳句の製作年代を確實に考證することは素より肝要であつて、その調査に没頭する研究家の出ることは要望せられるのであるが、それは將來に期待するばかりはない。

蝶の飛ぶばかり野中の日かけ哉

『笈日記』には「野中の日影」といふ前書が附いてゐるが『泊船集』には無い。『芭蕉發句説叢大全』に「句意は唯野なかにあそぶ蝶也。幽閑なる春の日なかの野づらの霞みわたりたるのみにして、なにより一つ目にとどまるものもなきに、蝶の折／＼飛びかふ羽かけのみ、わづかに野中の日陰也と見込ての句也。凡夫の眼に見ゆる所にあらず。照り渡りたる春の眞晝の風情言外の餘情は盡さるべし」と云つてゐる。大體に於て要を得てゐる。唯「凡夫の眼に見ゆる所

にあらず」と云つてゐるのは言過ぎである。淡々として、餘情の深い句と云ふべきである。なほ同書に、この句は夏か春かといふ澹齋の説を出してゐるが、春の句は勿論である。

子日しに都へゆかん友もがな

子の日は古へ正月初の子の日に、高きに登りて遠望し、陰陽の靜氣を得れば病邪を防ぐなどいふに原き、殿上人など京郊に出で、小松を引き若菜を摘むを例とした。芭蕉の頃には典故的の子の日の遊びは絶えてゐたであらうが、なほ都人士は郊外に出で、小松を引くなどの名残はあつたらう。王朝趣意を讚美した芭蕉は、子の日の遊びしに京都へ行きたいが、連れ立つて行く良き友が欲しいと云ふのである。「がな」は願望をあらはす助詞である。この句も淡々としてゐて、作者の心胸が覗はれる。まづは普通の作であらう。

菜鳥に花見顔なる雀かな

『泊船集』にある芭蕉道の記には、この句も載つてゐる。芭蕉眞筆の甲子吟行には洩れてゐる。『其便』に「吟行」といふ前書あり。『木枯し集』には此句も畫贊なるよしを註してゐる。又『國の華』には「これは大針といふ里の觀響堂奉納の句也」と記してゐる。奉納の句らしくはない。吟行の句を畫贊に用ひたのであるかも知れぬ。『芭蕉句選年考』に「大津より水口邊漂泊の間の句と見えたり」と云つてゐるのは的確とは云へぬ。『師走俗』に「此の句に吟行とあり。我身を燕雀のちいさきに喩へて、天地の間も一箇の菜鳥同然の間也。其間を廣き世界と心を安んじて生涯を送るは、いと果敢無く、菜鳥に花見がほなる雀哉と、我身の非を顧たる句也」と云へるは餘りに穿鑿に過ぎてゐる。そのやうな六つかしい句ではない。讀んで字の通りの句で、解釋にも及ばぬほどである。一寸うち興じた軽い句である。説叢が師走俗の説を非難してゐるのは尤である。

琵琶行の夜や三味線の音

近藤如行の『後の旅』に出てゐる句で、如行が「座頭など来て貧家のつれづれを紛しければおかしがりて」といふ前書を付けてゐる。『後の旅』は芭蕉の追善集で、元禄八年に出来た。芭蕉が如行亭に宿つた時に、盲法師を呼んで三味線を弾かせて芭蕉のつれづれを慰めたものであらう。芭蕉は三味線の撥の響を霞の降る響と聞きなして、彼の琵琶行の夜もかくやありけんと思ひやつての吟である。

琵琶行は唐の白樂天の有名な長詩である。樂天が左遷せられて九江郡の司馬になつてゐた頃、一夜滯陽江頭に客を送つて、不圖船中に琵琶を弾するを聴き、感を催ふした。彈するものは、もと長安の女で、色衰へて賈人の婦となりしが、賈人遠く去りて婦は江頭に淪落し、琵琶を弄んで哀を求めてゐた。樂天は惘然として長句を物したのであつた。芭蕉は座頭の三絃を聞いて切々の情を興じ、琵琶行の夜を想ひやつたのである。この句は故典に囚はれて生硬の感あり「音寂」も無理であり、一句信屈といふべきである。

なほ近藤如行は美濃大垣の人、戸田侯の家臣である。芭蕉は奥の細道の旅を終へた時も如行の家に着いてゐる。前に擧げた句はその時の吟のやうにも云はれてゐるが、その時はまだ秋九月の初であつた。これは冬の句であるから、野ざらしの旅の途次、如行亭にての作であらう。その時大垣の谷木因亭では、

死にもせぬ旅寝の果よ秋の暮

と秋の吟であるが、とかくするうちに冬に移つたものと想像される。桑名では冬の句を残してゐる。

貞享元禄元年又は二年野ざらしの旅の頃の作と推定される芭蕉の句は大體次の通りである。

白芥子や時雨の花の咲きつらん

我が宿は四角な影を窓の月
冬知らぬ宿や覆拵る音寂
遊び來ぬ鯨釣かねて七里まで
鯉釣らん李陵七里の浪の間
笠もなき我を時雨るゝか何と何と
からく折ふしすごし竹の霜
油氷り燈火細き寝覺かな
旅鳥古巢は梅となりけり
つゝじ生けてその藤に干鰯さく女
船足も休むときあり濱の桃
圃もてあふがん人のうしろつき
杜若我に發句のおもひあり
おもひ出す木曾や四月の櫻狩
山賤のおとがひ閉づる菴かな

右の内「からく」と「油氷り」「旅鳥」「つゝじ生けて」「圃もて」「おもひ出す」など、句として宜しきものもあれど、秀逸といふでもなく、又句意も多く平明であるから、解説は省くことにしたい。

野ざらしの旅と地方俳人

芭蕉の行脚は修行底であつて、名聞利達の爲でもなく、勢力扶植の爲でもなかつた。芭蕉は佛頂に参禪して、無爲の大道を悟得してゐたから、もう『貝おほひ』時代の彼ではなかつた。もう仕官懸命の地を羨んだ彼ではなかつた。唯俳諧の一筋につながる彼であつた。

けれど、彼の到るところ、彼の感化は大きかつた。其角が「此翁孤獨貧窮にして徳業にとめること無量なり」（枯尾華）と讃へたその徳孤ならずして、到るところ地方俳人の歸依追隨すること、佛門に於ける祖師の如くであつた。

芭蕉はまづ伊勢に至つて松葉屋風瀑を尋ね、十日ばかり足を止めた。風瀑は芳賀一品の門葉であつて、江戸にゐる時から芭蕉と風交があつた。又伊勢の山田の雷枝が「宿まゐらせん西行ならば秋の暮」といひ、「芭蕉とこたふ風のやれ笠、芭蕉」と脇を附けた。同國の勝延も「花の咲身ながら草の翁かな」に對して「秋にしほるゝ蝶のくづをれ、芭蕉」と脇を附けた。勝延は虚栗の作者であつた。それから舊里上野に滯在中この地の俳人に會したであらうが、詳しいことはわからぬ。

芭蕉は大和の竹内に千里を訪づれ、一人吉野の秋を探り近江を過ぎて美濃に入り、大垣の谷木因の家をあるじとした。木因は季吟門で芭蕉と同門の誼みがあつた。なほ大垣では近藤如行、宮崎荊口等が入門した。二人とも戸田侯の家臣で、荊口には此筋、千川、文鳥等の息子があつて、蕉門の有力な作者となつた。又塔山も「師の櫻むかし拾はむ落葉哉」と一句を寄せ「すゝきに霜の鬚四十一、芭蕉」と應じた。この「四十一」が芭蕉の年齒を定める上によく引

證せられる。伊勢に入りては桑名木當寺（本統寺）の古益亭を訪ひ、それより眞帆しづかに熱田に至り、林桐葉の家に止宿して歡待せられ、この地の俳人東藤、ユ山等と連吟あり、それより名古屋に入りて、山本荷兮、南杜園、岡田野水、加藤重五及び正平、羽笠等を指導して歌仙五巻を成した。所謂尾張五歌仙で「冬の日」と題して京都井筒屋から開板された。山本荷兮の撰で、有名な「芭蕉七部集」の第一集である。尤も七部集の名はずつと後に至つて起つた。「冬の日」こそは實に蕉風俳諧の生誕で、去來は「先師の變風に於ける、虚栗生じて次韻枯れ、冬の日出で、虚栗落ち、冬の日は猿蓑におほはれぬ。云々」と云つてゐるし、嵐雪、支考等も調子を合せて、冬の日を讚美してゐる。冬の日俳諧五歌仙はなほ虚栗の餘風の存するものありて醇乎たる蕉風とは云ひ難きものであるが、しかし、この五歌仙出で、天下俳人の耳目を驚かし、蕉風の一路向上の新氣勢を高めたことは明かである。

狂句	こがらしの身は竹齋に似たるかな	芭蕉
	たそやとぼしる笠の山茶花	野水
	有明の主水に酒屋つくらせて	荷兮
	かしらの露をふるふ赤馬	重五
	朝鮮のほそりすゝきのにほひなき	杜園
	日はちり／＼に野に米を刈	正平

(以上表六句)

冬の日野ざらしの旅における大いなる收穫であつた。前にも云つたが「虚栗」とこの「冬の日」は天明俳壇に大きな感化を與へて、俳諧中興の一つの原動力となつた。殊に堀田麥水は「夫蕉門の俳諧は冬の日、虚栗等の集に其道

を求むべきに、捨て、見ざる俳家多しと覚えぬ。深く蕉翁の意志を探らず。只句の姿より遷らんとするが爲に、理作に走り、他門に陥る」と云ひ「身なし栗の集は妙處句外にあり。句格に依らずして意味を取つて學び給へ。妙悉くありと覺ゆ」と云てゐる。麥水のことは既に記した。

芭蕉は再び上野に歸りて越年し、貞享二年の春奈良に出で、水取の行法を拜し「氷の僧の沓の音」と吟じ、京に上りて鳴瀧の三井秋風を訪ひ「きのふや鶴を盗まれし」と詠じた。この頃近江堅田本福寺の僧千那芭蕉に屬した。千那は三上妙式と稱し、初め俳諧を談林の高政に就いて學び官山子と號したが、落下六條の客舎に芭蕉を訪ひ、遂に蕉門に歸して葡萄坊千那と改め、有力なる作家となつた。

芭蕉は更に伏見西岸寺に任口上人を尋ね、大津にて江左尙白を得た。尙白は醫を業として三益と稱し、初め貞室門に入り、後談林の高政に就き更に田中常矩に従つたが、轉々して蕉門に歸した。しかし蕉門に歸した後も容易に蕉風に徹せず去來等と兎角意見を異にしてゐたことは去來抄などに散見する。芭蕉は近江の水口で故友服部蘆馬に邂逅して舊情を温めた。蘆馬は後土芳と改號して、忠實なる蕉門の作家となり、三草紙を著して芭蕉の言葉を傳へることに努力した。

芭蕉は再び熱田に入り、また桐葉亭に起臥して、桐葉、東藤、叩端、閑水、桂楫等と歌仙を卷いた。前の年の冬に卷いたものと併せて「熱田三歌仙」と稱せられ、安永四年に至りて曉臺の手に依つて開板せられた。三歌仙の俳諧は大體冬の日に彷彿してゐる。曉臺はこの集を大いに鼓吹してゐる。

尾張の國あつたにまかりける比人々
師走の海みんとて船さしけるに

海くれて鴨の聲ほのかに白し翁
申に鯨をあぶる益桐葉
二百年吾此やまに奔取て東藤
櫻のたねまく秋はきにけりユ山
入月に鵜の鳥のわたる空葉
駕籠なき國の露負れ行翁
(以上表六句)

野ざらしの旅以後の芭蕉

貞享二年四月、野ざらしの旅から江戸の古巣に歸つて芭蕉は、庵裡に起臥して長途の旅の疲れを慰めた。かゝる中にも門人同好の音づれしげく、俳を語り句を作つて年を送つた。

貞享三年芭蕉四十三歳、この年も芭蕉は深川の庵に籠居して大きな旅行はしなかつたが、俳諧の方は多事であつた。先づ新春を迎ふるや、其角の「日の春をさすがに鶴のあゆみかな」を立句として百韻の興行ありて連衆は芭蕉、其角のほか文鱗、枳風、コ齋、芳重、杉風、仙化、李下、舉白、朱弦、蚊足、千里、楊水、不卜、千春、映水等である。この百韻は「初懷紙」と呼ばれて蕉風興隆の規模をなすものである。初懷紙には芭蕉の評註が傳はつてゐる。人々の望に應じて芭蕉は即座に筆を執つたが、持病に堪へかねて五十韻にして筆を絶つたといふ。その註解は、

日の春をさすがに鶴のあゆみ哉 其角
元朝の日はなやかにさし出て長閑に幽玄なるけしきを鶴のあゆみにかけていひつらね侍る。祝言言外にあらはる。流石にと云ふには感おほし。

みぎりに高き去年の桐の實 文 鱗

貞徳老人云、脇體四道ありと立られ侍れども、當時は古くなりて景氣を云そへたるをよろしとす。梧桐遠く立ても木枯のまゝして 枯たる實の梢に残たるけしき言葉こまやかにして、桐の實といふは桐の木といはんも同じ事ながら、元朝に梢は冬めきて木がらしの其まゝなれども、ほのかにかすみ朝日匂ひ出て、うるはしく見え侍る體なるべし。但桐の實と附たる新しき俳諧の本意斯る所に侍る。

雪村が柳見にゆく棹さして 枳 風

第三の體、長高く風流に句を作り侍る。發句の景と少しかはりめあり。柳見に行とあればいまだ景に不對なり。雪村は畫の名筆也。柳を書べき時節、其柳を見て畫んと、みづから舟に棹さして出たる狂者の體珍重也。桐の立木詠やう奇特に侍る。附様大切也。

芭蕉が即席に五十韻まで註解したといふことは、事實かどうか。これに就いては、古來この自註を芭蕉の筆として無條件に信奉するものと、又その反對にこの自註は全然芭蕉の筆にあらずとして信ぜざるものがある。又この自註は芭蕉の自記としては信じ難けれど、よく芭蕉の俳諧精神を理解したるもの、筆にして簡にして要を得たる名解であるとすものもある。私はこの第一説に従ふものである。芭蕉にあらざればかくまで要領を得た解は下し難いと思ふ。

又三月二十日芭蕉の「花咲て七日鶴見る麓かな」といふを發句として清風、學白、曾良、コ齋、其角、嵐雪等一座の歌仙成り、清風の「一橋」が上梓された。清風は出羽尾花澤の豪商である。芭蕉が後年奥の細道の旅の折清風居にて「涼しさをわが宿として寝まるなり」と詠んだのは、この時からの舊知であつたのだ。

芭蕉は元來蒲柳の質であり、常に持病に悩んでゐたが、野ざらしの行脚に疲れも加はりて、とかく病氣勝であつた。その爲にや、常陸潮來の醫師本間道悦に就いて醫道を學んだ。芭蕉が醫道を修めたのは、醫を以て身を立てる爲であつたのだらうと云ふ説もあるが、さうではなく自分の病氣保養の爲であつたらう。醫を學んだと云つても、深く醫道を究めたわけではなかつた。

成美の「隨齋語話」に「はせを昔常陸國本間氏に寄宿して醫を學ぶ。其時の自筆の誓紙、いまつたへて本間松江が家にあり」として、其誓紙の文言を出してゐる。近年本山竹莊氏の刊行された「水の音」には本間家傳來の芭蕉自筆の誓詞が寫影されてゐる。その全文

相傳醫術啓迪院一流祕書祕語耶豈漏佗乎若於違背者大小神祇別而生緣氏神可蒙御罰者也仍而起請文如件

貞享三年 物部道意 華押

丙寅四月十二日 松尾桃青 華押

本間道悦様

右文中、祕語の下の「耶」は隨齋語話には「那」の字にして「ナンゾ」と讀ませてゐる。その積りで書いたのであらう。誓紙の文字は芭蕉の自筆か、物部道意の筆か、研究の餘地があるやうに思はれる。啓迪院は岡本玄治で、江戸に住んでゐた。本間道悦はこの人から醫術を受けたのであらう。道悦は常陸の潮來の醫師で、芭蕉とは前からの知己

野ざらしの旅以後の芭蕉

だつた。道悦は自筆と號し道因、道仙、道意以下連綿として現代に及んでゐる舊家である。道悦の自筆と認められる芭蕉の診療書が本間家に傳はり、今は竹莊氏の所藏となつてゐる。

一、芭蕉風濕ニアタリ頂ヒキツリ咽少イタミツハキ呑コミニクキトナリ味浮ニハアラスシテスコシカアリテカズアリサノミツヨキ感冒デハナシ常ニキノ順ラヌ人ナル故氣フサカレメクラヌ證ナリ先宛心ニ活痛レ頭モ少アル故ニ加ヘニテ一貼用翌朝少ヨシ荷字脈ノ數モヘリタリシカレトモ夕アノ證ノカルキ

これは診斷書の断片らしく思はれる。芭蕉の誓紙に連署してゐる物部道意は萩原蘿月氏の調査に依れば、近江國伊香郡西物部村産で小三郎吉親といひ、道悦に醫を學んで江戸の町醫となり片山氏を名乗つてゐた。晩年には郷里に歸隱し、享保十四年十二月十四日に歿したことが、京都雙林寺の過去帳に載つてゐるといふ。

潮來の本間家には芭蕉の滞宿中食膳に使用した五器が傳襲されてゐたが、これも近年竹莊氏の藏となつた。この椀のことは隨齋講話に

常陸國小川の里松江が家に、芭蕉留錫のころ常に食をすゝめたる古五器二具あり。文化壬申の年、日向國眞彦といふ神職の人、その住る所の翁が岡といふに、文明中に勸請せし翁大明神といふ有(所祭猿田彦神)その社に芭蕉翁を合せ祭ると云事にて、諸國の句を勸進せし頃、松江が家に宿して此あらましを語り出るに、主この人の志の深きにめで、右の五器の中汁盤ひとつをおくれりとて、來り示してこれをよろこぶ。はなはだ古雅なる器なれば、左に圖す。

とて、その汁椀の圖を載せてゐる。龜末なる梨子地蒔繪にて高さ一寸九分、さし渡し四寸五分、糸底一寸七分とある。これは眞彦の譲り受けた一箇だが、水の音には本間家傳襲の五箇(飯椀、同蓋、汁椀、平、壺)の寫眞と寸法が

載つて居り「古樸な中朱、外梨地、慈壽繪の幾ヶ所は剝げ、春慶塗の箱には虫喰が認められて、二百五十年の星霜を物語つてゐる」と説明されてゐる。

貞享三年仲秋に「春の日」が版行された。編者は不明だが、荷兮であらうと認められる。歌仙三卷及び歌仙表六句と、附録として四季發句五十九の撰集である。歌仙の作者は荷兮、野水、越人、重五、巨巖、羽笠等名古屋俳人である。芭蕉の名は歌仙には見えぬが、發句は三句載せられてゐる。この書は「芭蕉七部集」の一つに數へられてゐる。

古池の句がこの集に載つてゐる。この句が芭蕉俳句の展開の上に意義深き一線を劃するものであることは既に述べたところである。かく言へばとて、私はこの句を芭蕉一代の傑作といふのではない。芭蕉の遺句千數百句の中には、古池の句に比肩すべきもの又はそれ以上の傑作と認むべきものが少なくないのである。

又芭蕉の心眼が開けて古池の句が出来たからと云つても、古池の句以後の芭蕉の俳句が、悉く佳句名吟であるといふわけではない。俳句は素より藝術であつて、俳句には俳句としての詩形があり、季題を核心として一句に表現する上に於ては言葉の制約も守らねばならず。如何に心的悟入があつても、それがそのまま天衣無縫に表現されるものにはあり得ない。芭蕉はその俳句の詩的表現を完了する爲に、實に容易ならざる苦心を重ねたものである。芭蕉ほど一句の完成に推敲した俳人はないのである。芭蕉の俳句が種々の形相に於て傳つてゐるのは、初案再案三案等推敲の結果である。古池以後の芭蕉の句にも、なほ表現完からずして、觀るに足らぬと思はれる句が今日に傳つてゐるのは、俳聖といへども如何ともなし得なかつたのであらう。

貞享二年三年頃の芭蕉の作と推定される句中より、良いと思ふものを擧げて見る。

觀 音 の 薺 見 や り つ 花 の 雲

野ざらしの旅以後の芭蕉

花 咲いて 七日 鶴 見る 麓 かな
 朝 顔の 花に 鳴き 行く 蚊の 弱り
 初 雪や 水仙の 葉の たわむ ほど
 酒 飲め ばいと 寝られ ね夜 の 雪
 月 白き 師 走は 子路 が 寝 覺 かな
 年 の 市 線 香 買ひ に 出 ば や な
 山 櫻 瓦 ふ く も の ま づ 二 つ
 などが ある。

観 音 の 菫 見 や り つ 花 の 雲

芭蕉翁發句集には座五が「花雲」になつてゐるが「花の雲」が正しいと思ふ。其角の末若葉に「鐘は上野か淺野かと聞えし前のとしの春吟也。尤病起の眺望成べし」とある。芭蕉は貞享三年頃には病氣がちであつたやうだ。深川芭蕉庵での吟である。観音は淺草の観音であらうとの舊説に従ひたい。芭蕉庵と淺草とは大分隔つてはゐるが、芭蕉時代の深川は郊外であつたから遙に淺草の観音の菫が見えてゐたものであらう。菫は元來は屋の棟だが、後世には屋根といふ位の意に用ひてゐる。芭蕉庵からの遠望で、観音様の屋根を眺めるとなして雲の如くに霞んだ花をなつかしんでゐるのである。この句の前書に「毘沙門堂の花盛り、四天王の榮花もこれにはいかでまさるべき、上なる黒谷下河原云々」といふ詠曲西行櫻の一節を用ひ、節付も附いてゐる。

花 咲 七 日 鶴 見 麓 かな

鈴木清風の「一橋」には「三月二十日即興」と前書がある。芭蕉句選には「鶴下りて七日花見るふもとかな」とある。「花咲て七日鶴見る」の方が良い。櫻の花の盛りは僅に七日ほどで、その間鶴が来てゐたといふのである。鶴が下りると七日づゝそこに遊ぶといふ説もある。その事實はともあれ、艶麗な櫻花に高潔な鶴を配した一幅の畫圖、なほ峰嶽を背景とした仙境の感がある。三月二十日即興とある前書に依ると想像ではなく、實景のやうにも思はれるが、しかし即興は即景ではなく、やはり不圖感じたまゝの作かも知れぬ。芭蕉には珍しい華麗な句である。

初 雪 や 水 仙 の 葉 の た は む ま で

陸奥千鳥、泊船集等この句形である。説叢大全にも、杉風家藏芭蕉眞蹟としてこの形になつてゐるが、篇突には座五「たわむほど」としてゐる。句としては「まで」よりも「ほど」の方が自然で良いと思ふ。水仙の葉の青々とした上に初雪のわづかに降り積つてゐる風趣は、清麗にして幽玄の感さへする。この句には「我くさのとの初雪見むと、よ所にありても空だにくもり待れば、急ぎかへることあまた日なりけるに、師走の中の八日はじめて雪降りけるよろこび」といふ前書あり、待ちあこがれての初雪であつたことがうかゞはれる。

酒 飲 め ば い と 寝 ら れ ね 夜 の 雪

支考の本朝文鑑に、左の如き前書ありてこの句を載す。
 あら物くさの翁や、日比は人のとひ來るもうるさく、人にもまみえし人をもまねかじとあまたゝび心にちかふなれど、月の夜雪のあしたのみ友のしたはるゝもわりなしや。物もいはずひとり酒のみて心にとひ心にかたる。庵の戸おしあけて、雪をながめ又は盃をとりて筆をそめ筆をすつ。あら物くるほしの翁や。
 門人其角の大酒を戒めて、

朝顔に 我はめし食ふをとこかな

と云うてゐる芭蕉ではあるが、芭蕉は全くの下戸ではない。量はさほどでもなかつたやうだが、酒中の趣は解したのであつた。その芭蕉が獨居のつれづれに、折から雪夜の寒さしのぎに、ひとり酒飲みて心にとひ心に語る。夜は更ける雪は降りしきる。佗寝の床いと眠りがたく、筆を染め筆を捨つ。風狂の隠士芭蕉の境涯の俚はるゝ一句である。句の中の「いと寝られぬ」の「ね」は「す」に同じく、一層寝られないといふ打消しである。

このほかにも、貞享二三年頃の作であらうと云はれてゐる句は、

幾霜に 心ばせをの松飾り
留守に 来て梅さへよその垣ほかな
地に たふれ根により花の別れかな
煩へば 餅をも食はず桃の花
忘るなよ 藪の中なる梅の花
里の子よ 梅折り残せ牛の鞭
破風口に 日影やよわる夕涼み
座頭かと 人に見られて月見かな
秋を経て 蝶もなめるや菊の露
雲をりく 人を休むる月見かな
木枯や 竹にかくれてしづまりぬ

花みな枯れて哀をこぼす草の種
時雨ゆくや船の舳網にとりついて
さし籠る葎の友か冬菜賣
めでたき人の数にも入らん老の暮

など多数であるが、特に問題にするほどの作ではなからう。又續虚栗に載つてゐるものはその方に譲ることにする。たゞ曾良の「雪丸げ」に「深川八貧」として芭蕉庵の清貧の俚ばれる句が載つてゐる、貞享三年冬の作であらう。

深川八貧

其の米買ひ 米買ひに 雪の袋や 投頭巾 ばぜを
其の薪買ひ 雪の夜はとりわき 佐野のまき買はむ 依水
其の酒買ひ 酒やよき雪ふみたてし 門の前 苔翠
其の炭買ひ 炭一升雪にかざすや 山折敷 泥芹
其の茶買ひ 雪に買ふ 唯しごとせよちやん袋 夕菊
其の豆腐買ひ 手に据ゑし 豆腐を照らせ雪の月 友五

この六句しか見えない。芭蕉の句は、米買ひに行くのに、雪が降りかゝるので、米を容れる爲の袋を取敢へず頭に投げかけて頭巾に代用したといふのである。投頭巾とて、頭巾の頭を長く四角に縫ひ、後へ投げたやうに垂れたものがあるからの洒落である。

古池以後の芭蕉の句にも、かうした洒落はあるのである。貞徳や談林風の俳諧味（滑稽味）のやうに理窟で固めた

洒落とは違つて、輕妙な洒落はあるのである。禪僧の多くに見るやうな洒々たる風格、即ち洒脱な氣持は芭蕉の俳句にもあるし、その門下の文章、惟然などの俳句には一層強く感ぜられるのである。洒脱といふことは禪の悟りの一つの特徴であるやうに思はれる。所謂禪味とか俳味とかいふものは、この洒脱を意味するやうである。無論洒脱がそれ等の全體ではないけれど、たしかに一つの特色には違ひなからう。

右に挙げた句のほかに『もとの水』といふ俳書には貞享三年の芭蕉の句として、

伊勢が賣る家にも來たり千代の春
子規なくや黒戸の濱びさし
蛤の口しめて居る暑さかな
又越えむ佐夜の中山はつ松魚
夕風や盆桃灯も柳はなれ
川舟やよい茶よい酒よい月夜
あらがねの土よりおこる火桶かな
硯このむ奈良の法師が巨燵かな
年忘三人寄て喧嘩かな
うかくと年寄る人やふる曆

などを載せてゐる。この中の「伊勢が賣る家」「蛤の口しめてゐる」「硯このむ奈良の法師」などは悪くない句と思ふ。これ等をすべて芭蕉の作として載せてゐる芭蕉句集もあるし、又佳句として解釋してゐる人もある。しかし「も

との水」は落柿舎重厚の編するところで、芭蕉の遺吟を探索して天明七年の板行であつて、句の出所の明瞭でないものが多いから、姑く他日の考究に俟つこととする。

野ざらし紀行後の芭蕉は深川の草庵に籠居して病を養うてゐたやうだ。前年行脚の疲れが出たのであらう。芭蕉の俳句は大自然から感動を受けて、その直感を詠じた句に優れたものが多い。芭蕉の句は概して客觀に基礎づけられた主觀的表現の作である。だから旅行吟に優れたものが多いのである。是歲に佳句の乏しいのは草庵に閑居してゐたからであらうか。

續 虚 栗

芭蕉は深川の草庵で、貞享四年四十四歳の春を迎へた。この歳の仲秋鹿島旅行までは、庵裡に起臥してゐた。春よりの發句は、十一月に刊行された「續虚栗」に多く載せられてゐる。この書は鹿島旅行より後に板行されたが、集中の句の多くは、旅行以前の作と思はれるから、先づ續虚栗を観ることにする。

續虚栗は其角が、前に刊行した虚栗の續篇として撰集したもので、蕉門一派のみならず、他派の句故人の作をも加へて、發句四百六十餘、歌仙四、半歌仙一、その他を集成した堂々たるものである。卷尾に「貞享丁卯歲霜月仲三日」とあるのは刊記であらう。貞享四年十一月十三日である。其角時に二十七歳、年少氣鋭、才氣煥發、最も得意の壇場であつた。主なる作者は編者其角を始め、芭蕉、杉風、去來、素堂、嵐雪、曲水、曾良、沾徳、任口、尙白、千春、仙化、不卜、琴風、半殘、嵐蘭、孤屋、風虎、破笠、千子、露沾、野水、荷兮、杜國、湖春、濁子、維舟等々、

當時一流の作家を網羅して洩らすなき概がある。この集の序文は山口素堂が筆を執つてゐる。續虚栗の發刊が、芭蕉の『笈の小文』の旅の出發後であつたから、芭蕉に代つて素堂が書いたのであらう。序の中に「あるは上代めきてやすくすなほなるもあれど、たゞにけしきをのみひなして情なきをや。古人いへる事あり、景の中に情をふくむと。(中略)又きし事あり、詩や歌やこゝろの繪なりと、野渡無人船自横、月落かゝるあはち嶋山などのたぐひなるべし云々」と云つてゐるのは景情備はるの句を佳しとする素堂の意見にして、又當時芭蕉風發句の傾向を窺ひ見るべきものと思はれる。けに、これを虚栗の信屈な調に比すれば大體に於て句調穩雅和平にして、内容的にも藝術味の饒かなものが重きをなしてゐる。古池の句に依り開かれた芭蕉の俳諧精神が、暫くの間にかくも感化の及んだことは、當時の俳人の努力の然らしめる所であらう。

芭蕉は、發句には芭蕉と書き、連句には翁と書かれてゐる。集中に載つてゐる芭蕉の發句は二十六である。

よく見れば 薺花 さく垣ねかな

薺は正月の七草の一つで、十字花科の植物で、四月頃に至り莖を抽きて、總狀花穂をなして開花する。花は小さき四瓣の白花で、花の後に三稜扁平の短角を結び、その形によりてべんべん草と呼ばれる。

薺は路傍至る所に見られる雑草であるが、その花は餘り人の目につかず。これが七草の薺の花と知る人さへ少ない。芭蕉はその雑草の花に目をつけて、薺よそこに咲いてゐるのかと云つた調子で、呼びかけた親しみの深い句である。「よく見れば」は月並に墮し易い言葉であるが、こゝではよく生かされてゐる好句である。句選年考には舉白集を引く。

古郷の籬は野らと 廣く荒れて 摘人なしに 薺花咲く

といふ長嘯子の歌を擧げてゐる。芭蕉は舉白集に親んだやうだから、この歌からの發想かも知れない。それにしても、句は句としての味がある。

花の雲 鐘は上野か 淺草か

「草菴」といふ前書がある。深川芭蕉庵にての吟である。其角の芭蕉終焉記にも「橋あり、舟有り、林あり、塔あり花の雲鐘は上野か淺草かと、眼前の奇景も捨難く」と云つてゐる如く、貞享當時の芭蕉庵からは遙に上野淺草あたりの眺望が利いたのである。尤も上野あたりの花の雲がけさやかに眺められたものではなく、實際に淺草あたりの鐘が聞えたのもなからうが、をちこちの花盛りに、どこからともなく聞えて来る鐘の聲を、上野か淺草かと聞き入つた胎動たる氣持である。情趣の深い佳句である。

鶴の巢も 見らるゝ花の葉越哉

鶴は鶴の類で、こふのとりになど呼ばれる眼のほとり黄赤にして全身白く、翼の下黒く、聲をたてない。松の栢寺堂の棟などに巢を營むといふ。櫻の花を隔てゝ葉越しに鶴のうるはしき姿を観る。正に一幅の畫圖である。悠閑たる春の趣のよく現はれた好句である。芭蕉の句には單なる寫生は無いのであるが、この句は寫生に近いと言へよう。だが「見らるゝ」といふ言葉に作者の氣分が出てゐる。なほ句選年考に「東都大寺の棟瓦の上に、鶴の巢まゝあり」と云つてゐる。この句の鶴の巢も、そんな所に在つたのであらう。想像の作ではない。

永き日も 囀りたらぬ ひばり哉

續虚栗に従へば、この句と「原中や」の二句は、孤屋が芭蕉庵を訪れた時に示されたといふことである。句は平明で、特に解説を要しない。雲雀の元氣の満ち／＼てゐる、飛躍な趣がよく現はれてゐる。笈日記には「永き日を」と

なつてゐる。その方がすつきりしてゐる。「永き日も」ではさらりとしない。

原中や物にもつかず鳴く雲雀

まことに洒落な句である。芭蕉の深い心境が味はれる。禪味があると言へよう。丈艸の「取つかぬ心で浮ぶ蛙かな」と好一對の佳句である。雲雀が大空高く昇りて、有頂天に鳴いてゐる情趣がよく味はれる。「物にもつかず」は雲雀の姿のみではない。その聲もであり、それを聞いてゐる芭蕉の心でもある。すべての繫縛から解放された句である。幽玄味の感ぜられる句である。尤も西行の和歌に「雲雀あがるあら野に生ふる姫百合の何につくともなき心かな」といふのがある。芭蕉は山家集を愛誦してゐたから、それから換骨したやうにも思はれるが、矢張芭蕉の禪の悟からの發想と見る方が妥當であらう。

さざれ蟹足這ひのぼる清水かな

「さざれ蟹」は「さざれ石」などいふと同じく、小さな蟹である。溪川などに棲む薄赤色をした小蟹である。行脚の途中、足のほめきを冷すとして、清水に浸すと、水底にゐる小蟹が、足の甲などに這のぼることは、誰でも體驗することである。行脚俳人芭蕉の姿のよくあらはれた好句である。言葉のしらべもよろしい。この句は天明調の先驅をなしてゐると評した人もある。さう言はれぬこともない。

養虫の音を聞きに來よ草の庵 (聽用)

栞集には「くさの戸ばそに住わびて、あきの風のかなしげなるゆふぐれ友達のかたへいひつかはしける」と前書がある。草庵は深川の芭蕉庵である。續虛栗にはこの句の次に「聞にゆきて」と前書して、

何も音もなし稻うちくひて蝨哉 嵐雪

とある。されば、芭蕉が友達といつたのは嵐雪等である。養虫は鳴く虫ではなからうが、例、枕草子に親に捨てられて「ちよよ」と果敢なげに鳴いたと書いてあるがもとで養虫は鳴く虫と誤られたのであらう。芭蕉が草庵の徒然なるまゝに、養虫の音を聞きに來いと嵐雪を誘ひ出したのである。さびしさのしみんと心をうつ句である。養虫が鳴くとか鳴かぬとか、科學的研究は無用である。どちらでも句の價值にかはりはしない。

土芳の養虫庵集に、元禄元年三月某日、折から上野歸郷中の芭蕉は土芳の草庵を訪ひ、懷中より面壁の畫を出だし、この庵の物にとて終夜畫きしとして、その贊に「養虫の音を聞に來よ」の句を認めて渡された。土芳はこの句に因みて養虫庵と名づけたと記してゐる。今残つてゐる養虫庵の由來である。

草庵の月見

名月や池をめぐりて夜もすがら

八月十五夜、芭蕉庵にて月見の句である。其角の雜談集に「芭蕉庵の月見んとて、舟催して乗りたれば、

名月や池をめぐつて夜もすがら 翁

すゝめて船にさそひ出しに、清影をあらそふ客の舟、大橋に折れてさはぎければ、淋しき方に漕廻して、各句作をうかゞひけるに、仙化が従者、舳のかたに酒あたゝめて有ながら、

名月は沙にながるゝ小舟哉 吼雲

翁をはじめ我々も、かつ感じかつ恥て、九ツを聞て歸にけり」

とある。九ツ(夜の十二時)を聞いて歸つてから、芭蕉はなほ寢に就かず、夜すがら月を眺めたのであらう。月夜の風色飽かぬまゝに、清興に乗じて我を忘るゝ驛客の姿、眼前に髣髴たるものがある。この句「池をめぐりては」續虛

栗には「池をめぐつて」になつてゐるが「池をめぐりて」とある方が宜しい。

起 あ がる 菊 ぼ の かなり 水 の あと

草庵の雨といふ前書がある。芭蕉庵での作である。「水のあと」は出水のあとである。霖雨の爲に水浸しになつて倒れかゝつてゐた菊の花が、そつと起き直らうとする利那の風姿である。雨も小降りになり水も退いた後の趣がよく出てゐる。心が靜かに澄んでゐなくては、このやうな幽かな趣の味はれるものではない。

瘠 な が ら わ り な き 菊 の つ ぼ み か な

『笈日記』には「如行亭」と前書がある。大垣の近藤如行の家での吟である。

「わりなき」は「道理なき」の略語といふが、この句の場合は、せんかたなく、強ひて、つとめてなどの氣持をあらはしてゐる。瘦せ弱りた菊の、身に堪へ難きながらにつとめて蕾を付けてゐる様である。いふべからざる風趣をあらはしてゐる。この句の場合これより適當な言葉はあり得ないと思ふ。「わりなき」といふ言葉はこの句の爲に出來てゐたと云へる。芭蕉のこの時代の作としては佳句の一つである。

曾良何某、此あたり近く假に居を占めて、朝な夕なに訪ひつ訪はる。わが喰ひ物いとなむ時は柴を折りくぶる助けとなり、茶を煮る夜は來りて軒を叩く。性隠閑を好む人にて、交金を斷つ、或る夜雪に訪はれて、

君 火 を 焚 け よ き も の 見 せん 雪 丸 げ

曾良は河合氏にて、後に芭蕉の奥の細道の旅を助けた人である。芭蕉庵の附近に棲んで、薪水の勞を執つた一人である。或夜雪の中に芭蕉を訪れた。芭蕉も獨居のつれづれなる折とて、歡び迎へて「君火を焚いて呉れ、よいものを見せてあげよう」とて芭蕉は庭に下りて雪丸げをつくつたのであつた。雪丸げは雪をころがして大きくする子供の遊び

である。芭蕉にはかうした子供らしい氣持があつた。それが詩人としての特性である。芭蕉を氣むづかしい親爺とのみ思ふのは誤解である。

年 の 市 線 香 買 ひ に 出 で ば や な

年の市は新年用の物を賣る市であることいふまでもない。隠者といひ獨居といひ、年の市とて芭蕉は是非買はねばならぬ品物はない。線香でも買ひに行かうかなあと、獨りごちてゐるのである。「行かばやな」は「行かうかなあ」といふ軽い希望である。半僧半俗の芭蕉の境涯のあらはれた句である。線香は寛文七年五島の一官といふもの支那の福州より傳へその子が長崎で始めて製造したといふことが、近代世事談に見えてゐるから、線香が江戸あたりへ來たのは、この句の出來た二十年にも足らぬ前の事で、線香を買ふといふことは舊臭いことでは無かつたであらう。

笠 寺 や も ら ぬ 窟 も 春 の 雨

『熱田三歌仙』に「笠寺にて」と前書あり『千鳥掛』には奉納とある。笠寺町は今名古屋市南区に屬してゐるが、元は星崎の内であつた。そこに天林山笠覆寺、俗に笠寺と呼ばれる眞言宗の寺院がある。開基は善光上人、聖武帝の御宇といふ。後兵火に罹りて諸堂滅び、本尊十一面觀世音は空しく曠野に立たせ給うた。時に鳴海の長者の侍女に美艷なるものあり、深くこの觀音を尊信して參詣怠らず。ある時一村雨降り來りて靈像雨に浸り給ふ。彼の侍女被れる笠を着せまゐらせ、自らは笠なくして路傍に彳亍。たま／＼藤原兼平卿吾妻へ下る途すがら之を見て、鳴海の長者に乞ひて召連れて都へ歸る。彼女北の方となりて後この地に下り、伽藍を營み尊像を安置した。本尊は今も笠を被り給ふ故笠寺と呼ばれる。これが縁起の大略である。

芭蕉は春雨の中をこの寺に詣で、この句を奉納したのであらう。句の中に「窟」と云つてゐるのは、伽藍のこと

である。曾ては雨ざらしになつてゐた御本尊も、今は伽藍の中におはしまして雨は洩つてゐないが、春雨は昔のやうに降つてゐるといふのである。雨は今も降つてゐるが、御本尊は御安泰でめでたいといふのである。大僧正行堂の「草の庵になに露けしとおもふらんもらぬ岩屋も袖はぬれけり」といふ歌を踏まへての作といふ説もあるが、穿ち過ぎである。

この句「芭蕉句選拾遺」には「笠寺や窟ももらす五月雨」となつてゐるが、誤である。

碓打つてわれに聞かせよや坊が妻
これは野ざらし紀行に出てゐた。

萩原や一夜はやどせ山の犬
寺に寝て誠がほなる月見哉

この二句は鹿島紀行に出てゐるから、そこで解釋しよう。

旅人と我が名よばれん初しぐれ

これは笈の小文に出てゐるから、そこに譲らう。

右のほか續虚栗に載つてゐる芭蕉の句は、

誰やらが妾に似たりけさの春
頼よりは海苔をば老の賣もせて
郭公なきく飛ぞ聞はし
卯の花も母なき宿ぞ冷じき

髪はえて容顔蒼し五月雨
山賤のおとがひ閉づるむぐら哉
いなづまを手にとる闇の紙燭哉
月雪とのさばりけらし年の暮
初雪や幸ひ庵に罷りある
等であるが、解説は省く。

なほ是歳の句の中で、續虚栗に載つてゐる以外に捨て難いものがある。

祖師の自畫贊

晝顔に米つき涼むあはれなり

この句は「續の原」に出てゐる。「栗集」には「夕顔」となつてゐるが「晝顔に」が句として優れてゐる。

前書の「祖師」は支那禪統第六祖の大鑑慧能禪師のことである。慧能は初め新州の百姓であつたが、志を起して五祖弘忍に参じて所見を述べた。五祖は慧能に命じて碓を踏ましめた。慧能曰を春くこと八閏月「菩提本無樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃」の偈を呈した。五祖之を器として慧能に衣鉢を傳へ、彼に法を嗣がしめて六祖たらしめたのであつた。

芭蕉の師佛頂は、臨濟宗の僧である。臨濟宗は六祖の傳統である。慧能は南岳一馬祖一百丈一黃檗一臨濟となつてゐる。臨濟の法裔黃龍が日本の榮西禪師に傳へ、榮西が日本臨濟宗の祖となつて、佛頂はその流れを汲んでゐる。だから芭蕉が祖師といつたのは六祖慧能を指してゐる。

その六祖が、まだ五祖の許で米を搗いて居た事を追想しての畫贊である。六祖が米を搗いて、勞れて一休みしてゐる。その際とりに畫顏の花が咲いてゐる。六祖は畫顏の花を見てゐるでもなく、見ないでもない。二者の交渉は不離不即である。そして百姓出の米搗慧能の洒脫な風格と、畫顏の洒々然たる風姿との間には、内質的に通ふものがある。そして、朝顔よりも夕顔よりも、畫顏の方が禪味を帯びてゐる。

嵐雪があがきしに、さんのぞみければ

葬あざなは 下 手 の か く さ へ 哀 な り

句意は解説するまでもない。悟り切らねばかう端的なものゝいひ方は出来ない。師弟の情味のあたゝかさが感ぜられる。

鹿島紀行の旅

貞享四年八月、芭蕉は附近に棲める河合會良と僧宗波を伴ひて、常陸の鹿島詣をした。出發の日は不明だが、芭蕉庵の名月を眺めての後であり、鹿島の月見がてらに、參禪の師佛頂和尚を訪れたのだから、十七八日頃であつたらう。その時の紀行が三種板行されてゐる。其の一は杉風の家に傳はつた芭蕉の眞蹟を採茶庵梅人が摹刻して「かしま紀行」と題して寛政二年に板行した。其の二は潮來の本間家に傳はつた眞蹟を松籟庵秋瓜が摹刻して「鹿島詣」と名づけて寶曆二年に上梓した。其の三は前記本間家傳來のものを同家で、文化十年に出板した。これも「鹿島詣」と號した。三書を比較するに、少しづつ語句の異なるところがある。

芭蕉等は草庵の門前から舟に乗り、小名木川の疏水から江戸川に廻り、東岸の行徳に上り、それから徒歩で布佐に至り、更に利根川を舟にて下り、潮來を経て鹿島明神に詣でた。紀行には

この秋鹿島山の月見むと思ひ立つ事あり。伴ふ人ふたり、一人は浪客の士、一人は水雲の僧。僧は鴉の如くなる墨の衣に三衣の袋を袷にうち掛け、出山の尊像を厨子に崇め入れて背中におふ。拄杖曳きならして、無門の關もさはるものなく、あめつちに獨歩して出でぬ。今ひとり、僧にもあらず、俗にもあらず、鳥鼠の間に名をかうぶりの鳥なき島にも渡りぬべくて、門より船に乗りて、行徳といふ處に至る。船をあがれば馬にも乗らず、細脛の力ためさむと、かちよりぞ行く。

と筆を起してゐる。浪客の士は武家出身の會良であり、水雲の僧は宗波であることいふまでもなく、今ひとり半僧半俗の芭蕉である。

野ざらし紀行の後僅に二年ばかりを経ての鹿島紀行ではあるが、芭蕉の文章はすつかり變つてゐると言つてもいい。野ざらしの方は漢文くづしの、どちらかと云へば生硬なものであつたが、鹿島の方は擬古體の雅びやかな流麗な筆致で、芭蕉の紀行文の中にも異色あるものと思はれる。だが、それだけ俳文としての味は奥の細道の文には及ばない。細道の文は、挿まれてゐる俳句としつくり調子が合つてゐる。鹿島紀行は短いものであり、獨立した文章として觀るべきものとしての心構へで筆を執つたのであらう。

芭蕉等は行徳から徒歩で八幡の町を經「かまがひ」(釜谷現千葉縣千葉郡豊富村鎌ヶ谷)の廣野を過ぎり、折からの秋景色に恍惚とした。

萩は錦を地に敷けらむやうにて、爲仲が長楯に折入れて、都のつとに持たせたるも風流にくからず。きちかう、を

みなへし、かるかや、尾花みだれ合ひて、小男鹿の妻こひわたる、いとあはれなり。野の駒、所得顔にむれありく。またあはれなり。

と記してゐる。土佐か住吉の繪巻物を見るやうな、色彩の薫りがする。

芭蕉等は、その日の暮に利根川のほとりの布佐に到り、ある漁家にて憩ひ居りしに、月隈なく晴れけるまゝに、夜舟さし下して鹿島に着いた。行徳より布佐まで八里、布佐より鹿島まで舟行十一里といふ。

鹿島には着いたが、晝から雨しきりに降りて、月見のあては外れた。鹿島の丘の登り口に根本寺といふ臨濟宗の寺があつて、佛頂禪師が住んでゐられる。禪師は既に隠遁してゐられたが、芭蕉等はその草庵に禪師を尋ね、久瀧を叙した。その夜は雨の音を聞きながら眠りに就いた。紀行には、

願る人をして深省を發せしむと吟じけん。しばらく清淨の心を得るに似たり。曉の空聊か晴間ありけるを、和尙おこし驚かし侍れば、人々起き出でぬ。月の光雨の音、只あはれなる氣色のみ胸に満ちて、言ふべき言の葉も無し。はる／＼と月見に來たるかひなきこそ、本意なきわざなれ。かの何がしの女すら時鳥の歌得詠まで歸り煩ひしも、我が爲にはよき荷擔の人ならむかし。

と書いてゐる。曉近くなりて、いさゝかの雲間に月の顔を拜んだらしい。杜甫の「遊龍門奉先寺」の詩に「天關象緯通。雲臥衣裳冷。欲覺聞晨鐘。令人發深省」と云ひし晨の趣を味ひ、清少納言が時鳥を聞きに行き、時鳥の歌をえ詠まで歸りし事など想ひやりて旅情を慰めた。その時の芭蕉の句は

月 早 し 梢 は 雨 を も ち な が ら
寺 に 寝 て ま こ と 顔 なる 月 見 かな

であつた。前句は殊に清新にして、景情を兼備してゐる。樹々の梢は降りみ降らすみの雨の雫を帯びながら、曉の月の光ほのかに映えて、冷澄の氣脈々として人に迫る。雲は月の面を掠めて軽く飛び、雲に誘はれて、月もまた走るかの感がある。後句は閑寂なる禪刹裡に幽遠なる月を賞で「人をして深省を發せしむ」といひし杜詩を味ひ、如々の心面てにあらはれ、一座黙々たる雰圍氣が「まこと顔なる」詞によく表はされてゐる。この時、

雨 に 寝 て 竹 む ら か へ る 月 見 かな 曾 良
月 さ び し 堂 の 軒 端 の 雨 し づ く 宗 波

の句があり、和尙も

をり／＼にかはらぬ空の月かけもちぢのながめは雲のまに／＼と詠んでゐる。禪僧らしい口ずさびである。

芭蕉の「月早し」の句は、根本寺の庭に句碑として建てられてゐる。又「まこと顔」の句は、芭蕉の眞蹟と稱するものが根本寺に遺つてゐる。その前書に「八月十五夜」とあるが、十五夜の名月は芭蕉庵で見たのだから、芭蕉の眞筆といふことは疑はしい。根本寺のこと、佛頂禪師のことは、私が前に記述した「芭蕉と佛頂禪師」の項を参照ありたい。

鹿島紀行には次の句を附してある。

神 前
此 の 杉 の 實 生 え せ し 代 や 神 の 秋 芭 蕉
野

萩原や一夜は宿せ山の犬 同

田家

刈りかけし田づらの鶴や里の秋 同

賤の子や稻すりかけて月を見る 同

芋の葉や月待つ里の焼ばたけ 同

神前は鹿島明神の神前にての吟であり、野はかまがひの原であり、田家は途次の農村であらう。

この杉の實生えせし代や神の秋

官幣大社鹿島神宮の祭神は武甕槌命であり、神武天皇の御宇に創建せられたと傳へられてゐる。境内に聳え立つてゐる老杉は所謂神代杉である。この老杉の實生えしたのは神代の昔であらうと想はれる。その神代の秋の偲ばれるといふ句意で、老杉を讀へる心は即ち祭神を讀へまつる心である。

刈りかけし田づらの鶴や里の秋

野飼の鶴が刈りかけし稻の田面に下り餌をあさる、農村の秋景淡々と叙して味の盡きぬ句である。

芋の葉や月待つ里の焼ばたけ

焼ばたけは早のつよい日焼畠である。「月待つ」は芋名月を待つてゐるとの解釋が安富のやうだが、芭蕉の鹿島詣は芭蕉庵で名月を眺めて後のことだから、月待つは月の出を待つと解せねばなるまい。焼畠といふ感じは晝の方が強いけれど。

芭蕉は鹿島詣の歸途、潮來の自準亭に立寄つた。自準は先に芭蕉が醫を學んだ本間道悦である。鹿島紀行の終に

「歸路本間自準に宿す」として、

増せよ薬干す宿の友雀 あるじ

秋をこめたるくねの指杉 かく

月見むと汐引のぼる舟とめて 會良

貞享丁卯仲秋末五日

と三吟を添へてある。本間家の記録には、

鹿島詣一卷、是は鹿島の歸路自準亭を訪はれ、永く逗留なされ、余が家にて筆を採られしものなれば、是を家寶の

第一とす。

とある。自準亭の滞留中、芭蕉の用ひたといふ五器が本間家に傳はつてゐたが、近年東京の本山竹莊氏の藏に歸し、

その寫真が水の音に載つてゐる。

この歳秋八月京都の去來は妹の千子を連れて伊勢参りをした。その記念に去來は「伊勢紀行」をものして、その草稿を送りて、芭蕉に跋を需めた。所々添削して跋を書いて與へた。この伊勢紀行は嘉永三年、南々、寄三等によりて文章の寝ころび草と合せて版行された。伊勢紀行には、

白川や屋根に石おく秋の風 去來

奥山や五聲つゞく鹿の聲 同

伊勢まではよき道づれよけさの雁 千子

小鳥さへ渡らぬほどの深山かな 同

鹿島紀行の旅

泊りく 稻する 唄もかはりけり 同

などが載つてゐる。芭蕉の跋文の終りに、
東 西 あはれさひとつ 秋の風 芭蕉
の一句が載つてゐる。この句は笈日記には「西東」となつてゐる。句としてはこの方があはれが深い。千子は才女であつたが、元禄元年若くて世を去つた。芭蕉は、

なき人の小袖も今や土用干
の弔句を去來に贈つた。

同じ年、一柳軒不卜等句合『續の原』を撰してその判を春は素堂、夏は調和、秋は湖春とし、冬の判者は芭蕉であつた。芭蕉判の冬十二番の作者は嵐雪、不角、文鱗、琴風、去來、孤屋、舉白、不卜等二十四人で、特に注意するほどの句もなく、判の詞も取り立てゝいふほどのことはない。

十二番煤掃

左

何方に行いてあそばん煤はらひ 舉白

右勝

煤とりて寺はめでたき佛かな 不卜

すゝはきの日の遊び處を侘たるも、優にして艶なり。

右は寺の煤掃と思ひよりたる、先珍重にや。兩句、滑稽のまことをうしなはず。感心のきがたく侍れども、めでた

き佛哉といひし句のいきほひ、猶まさりて聞え侍れば爲勝。

蕉風の句もまだ一般的には、大したものではなかつたのである。なほ貞享四年頃の芭蕉の作と推定されてゐるものに

花に遊ぶ 蛇なくらひそ友雀

古巢たゞあはれなるべき隣かな

鳥さしも竿や捨てけん時鳥

起きよく我が友にせん寝る胡蝶

五月雨に鳩の浮巢を見に行かん

雨をりく思ふことなき早苗かな

瓜作る君があれなと夕涼

いでや我よき布着たり蟬衣

蓮池や折らでそのまゝ魂まつり

明けゆくや二十七夜も三日の月

である。

この秋は鹿島詣をはじめ、芭蕉の身邊多事多忙であつた。けだし芭蕉の健康が順調であつたのであらう。さればこそ遂に道祖神にそゝのかされて『笈の小文』の太行脚を企だつるに至つたのであつた。芭蕉の活躍はいよく元禄の檜舞臺に入るのである。

出版會承認
260038號

昭和十九年四月二十日初版印刷
昭和十九年五月十日初版發行(三,000部)



佛羅西葉

定價 六

特別行爲 二十八錢

合計 六圓二十八錢

著者 野田要吉

發行者 佐々木隆彦

印刷者 東京都芝區濱松町一ノ一三
邦植田嘉邦

發行所 東京都澁町區內幸町

株式會社

理想社

電話銀座(57) 三三三三
振替東京 七八三三
會員番號 一四〇五〇八番

成文堂印刷

配給元

日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

985
384

終

